

325
7
5

PETITE HISTOIRE DE L'ÉGL

I. CHARRON et T. KASHIO.

公教會小史

イジドルシヤロン著
樫尾太刀太郎譯

橫濱 天主堂

325-6

イジドルシヤロン著

櫻尾太刀太郎譯

公教會小史

大阪司教出版認可

明治三十二年
三月二十一日
發行

序

公會歴史は人をして敬畏心を涵養し宗教愛慕の念を熾ならしむる等世を補益すること甚多なる可し然れば真正の教訓をなすに公會歴史を除いて他に如何なる良法がある又教會の發出より其の發育の狀態及び公會は奇蹟的存續等の美談を求むるも他に決して有り得べからざることゝす且又昔日より公會を破壊せんとして續出したる叛徒に對し公會は己を維持せんとして戦ひ累世占むる勝利の狀態を看て其の値の優勝なる他に此類するものなきを認めん公會が一度進撃せば必らず凱旋し迫害起れば忍耐と殉教の勇を以て之に勝ち異端離教の徒現はるれば博士の才力と謙讓を武器となして之を退けず善罪誘來れば信者の信徳と卓絶なる操行を以て之を破り十八世紀に於ける不信神愛神の冷却に對して世の終り迄で

誤りなしと斷言せられたる教會の設立者即ち基督の加護に依つて之に勝てり

斯の如き快事は何人の爲めにも精神修養上效ある可きは勿論なり
 と雖も特に青年子女の爲めに有神論と無神論の交戦する場合有神論の無神論に對する攻勢力を強固ならしめ又將來公會に加害せんとする旨あれば従事加へられし迫害の状態を顧み公會の全勝に終る可きを審判するに最良の法と云ふ可し其の事蹟は本文に羅列するにより之を一讀せば始終公會に冥護を加へらるゝ神を覺ると同時に從來公會を盡滅せんとして世に有らゆる武器と方法とを採り全力を擧げて突撃し來ると雖も公會は能く此の難局に當り見事に打勝ち尙一層其の維持を堅固ならしめたるを了得す可し
 彼の無神論者が宗教に叛撃を加へんとするや神は之を前知せられ

シリユス、コンスタンテン、シヤルロマンユ帝に才智能力を被らせ榮譽のために大目論見を鼓吹し宗教の利益とすることを神は能く洞察し給へり

從來公教要理を問答體に作り子女の教訓に便益を與へたれば我々も此の法に則り幾十世紀に亙る公會史を瞬間に記憶せしめん爲め括めて以て世の子女教訓に便宜を與ふるものなり

著 者 識

公教會小史目次

第一章	一
第二章	自三百九十六年 至四百九十六年	三〇
第三章	自三百九十六年 至八百	四三
第四章	自一千〇九十九年 至一千二百七十九年	五九
第五章	自一千二百七十九年 至一千五百九十三年	七四
第六章	自一千五百九十三年 至一千七百八十九年	八六
第七章	自一千七百八十九年 至一千八百七十八年	九四

公會小史

第一章

△吾主の誕生と私生涯との重要事績を語れ

最早四千年以前より猶太人は救世主の世に出でんことを待てり而して神は救世主の來るべきことを約束し預言者を出して屢々之を知らしめたりしが、愈よ其の時機到來するや神はモイゼスの法に代ふるに尙一層完なる法を以てし、猶太人に代ふるに尙一層神聖忠良なる教會を以てし、遂に世界救贖、人類刷新の偉業を經始せられんことを思召されたり。

是に於て乎羅馬皇帝オギュストの御宇、猶太國王ヘロデの時代に當り神は大天使ガブリエルを人類中の至聖至潔なるマリアに遣はし、神の母となる榮位を承諾するや否やを告げしめたるに、マリアは感佩して神命を拜受するや、神の聖子基督は同年十二月

二十五日を以てベトレエム邑の厩の中に人性を禀けて降誕せられたり、此の時牧童は天使の啓示を受け、此の嬰兒の天主たることを知り來りて之に拜禮せり八日を経て割禮を受け名をイエズスと命じたり此の時東方より三人の博士等異星に導かれて來り拜す。

聖母マリアは基督誕生より四十日を経て教規に従ひイエズスをゼルザレムの聖殿に奉獻したり、時の王ヘロデは新國王の世に生れたるを聞きて大に恐れ且つ怒り之を殺さんと欲しベトレエム近傍にある二歳以下の嬰兒を殺すの命を國內に致せりマリアは默示によりて幼兒を懷ひて難をエヂプト國に避けたりヘロデ王薨じて後ちマリアはヨゼフと共に幼兒を伴ひて再びガリレア國のナザレトと稱する都市に歸り住すイエズス年甫めて十二歳猶太人の逾越祭に際し兩親に伴はれてゼルザレムに詣でたる時不幸にして父母之れを見失ひ、索搜三日の後、聖殿の内に博士等と論議するを認めたり乃ち之を伴ひナザレトに歸りしに神の子は依然人間に服従しヨゼフと共に大工の賤業を執れり。

△福音書に記されたる基督公生涯の言行は如何

イエズスキリストは三十年間身と隠晦に處し苦役を執りて世に公ならざりしが、當時基督の前驅者たるジョアンバプチスは基督に告ぐるに人間は罪あるを以て謝罪の意を表し天主の赦を受けべき爲めヨルダン河に於て洗禮を受くべきを以てせり、是に於て天主の子たるイエズスは四十日間齋戒沐浴して罪ある人性の群集中に於て洗禮を受け而して後罪の赦を受け初めて世に公生涯の言行をなせり。

即ちカナに於て第一の奇蹟を行ひたり是に於て基督は十二人の使徒を選定し相共に猶太國の都鄙を巡り聖教を布き人心を化導し奇蹟を行ふて病者を醫し或は死者をして蘇生せしめ或は盲者をして明を得せしめ聾者をして聞を得せしめ或は一呪して風波を靜め惡魔を逐ふて社會の害毒を除き或は屢少許の麴魚(魚を麴漬にしたるもの)を以て數千人の饑を凌がしむる等神聖なる恩恵を與ふること枚擧に遑あらず。

斯の如き尊き奇蹟を行ひ大なる恵を與ふると雖も之れが恩を思はず之れを拜禮せざるのみならず反て之に禍害を加へんとすることを變たてけれ、即ち猶太人の司祭博士はフ

アリゼオの如き偽善者は全然基督に反し害を加へんと揚言せしかば多くは之れに煽動せられ遂に反旗を翻すの妄状を見るに至れり而して彼等偽善の徒は屢々基督を殺害せんことを企つるも雖も基督が十字架上に磔せらるゝ時期至る迄彼等の企は遂に其功を奏する能はざりし也基督は己れ十字架上に死するの時期近くを知り自から遭難の免かる可らざる事を弟子等に語り然れ共之が爲めに毫末の憂色なく沮然として布教に従事せり而して基督は敵の面前に於てラザルを甦らしめ以て彼等をして自から改悛の途に向はしめんことを希ひたれどもファリゼオ人は之が爲め反て大なる反動を起し遂に殺さんとの念慮を懐くに至れり。

△吾主の死去と復活とを語れ

基督は逾越の祝日六日前に凱旋してゼルザレムに入りしが人民は樹木の枝を道路に敷きて之を歓迎せり而して木曜日に當れる逾越祝日の時使徒等と共に晚餐式を行ひ羊を屠りて之を食し聖體の秘蹟を制定し賜へり後ち使徒等と共にオリペト山中の森に赴き血の汗を流し臨終の時苦むが如き悲痛慘憺の状を呈したり時に惡徒ジュダスは、接吻

を以て師なる基督を猶太人なる惡徒の手に賣渡したるなり、基督は元より全能者なるにより一言隻句を以て惡徒を叱し之を斥るは實に易々たりと雖も苟も形骸を人性に現はし而して人間の罪を贖ふ爲には甘じて苦痛を受ざる可らずと遂に遭難を甘受せられたり。

其翌日に至り天主の御子なる基督は無慘にも鉄鎖を以て縛捕せられ羅馬人の爲めには猶太國の知事の許に護送せられぬ、群集は此の聖き天主の御子に向て早く基督を殺せよ基督を死刑に處せよと絶叫せり此時天主の子なる基督は不遜なる群集の爲めに殘酷なる人民の爲めに然かく侮辱讒言冒瀆を受くると雖も敢て一言を發せず自若として爲すがまゝに任したり嗚呼其苦みは果して幾何なりしぞ無智にして殘忍なる群集は容赦なく此の聖き聖體に向て鞭撻を加へき荆の冠を頂かせき聖き御主は野蠻の群集に蔑視せられ奴隸の受くべき十字架の刑を科せられ十字架の重さを負はせられカルワリヨ山に逐ひ登され終に十字架上に磔られ此の日午後三時に及び全く絶息し給ひぬ斯くの如く天主の子は身を犠牲にして遂に地獄の門に勝ち罪を贖ひ人間を爰に買戻されたり

斯く基督をして辱苦を受けさせたる大罪の爲め太陽は暗黒となり岩は碎け墓は忽ち開け死者は甦り聖殿の幔幕は二つに裂けて被造物は皆な救世主の死せられしを悲哀する状を呈するに至れり是に至りて刑の執行者たる番兵等も十字架に磔られたる者は之神なりと叫べり然るに猶太人の司祭及ファリゼオ人等は益頑固にして基督の名を消除せんと迄思慮したりと雖も元來人智には限りある者にして到底無限の全能者たる神に勝つこと能はざるにより、基督は預言の如く三日目に甦り四十日間使徒等に現はれ或は居を共にして信徳を暖め或は萬國に布教するの勇氣を興ふる等奇蹟枚舉に遑あらず、第四十日目に當り基督は使徒等を伴ひオリベト山に登り、弟子等に萬國民に布教するの命令と權とを興へられし後ち昇天し給へり。

△使徒等は何時初めて教を弘めたるか

是即ち基督が天國に昇られてより五十日目にして聖神臨降の日なり此の日使徒等及び聖母マリアは相集まりて祈りをなしたるありしに午後三時に至り俄然大風の如き聲あり之と同時に火焰の舌に酷似せる形現はれて集ひ人々等の頭上に止まりければ人々は

神聖の御蔭げを享け萬國の語に通じたるにより直に説教をなし奇蹟をも行ふを得たり折しも各國に於る猶太人は祭日に參詣する爲め來り集ひたる時なりければ奇蹟あるとを聞き之が實否を正さんとして來り集まるもの實に夥し其の時使徒の主位なるペトロは是れ福音を布く好機なりと思ひ立つて福音の説教をなし又基督の眞神なるの證言をなしたり此のペトロの言は即ち聖神の代言にして聞かれ而も其説教威力あるを以て聽衆は直に基督の言と信じ須臾にして三千人の改悛者を見るに至り直に請ふて洗禮を受けたりし時に紀元三十三年なり。

△初めの信者は如何なる風俗なりしや

新らしき信者の群集は聖書の言の如く基督の言の如く皆な一體の如きものにして自己の財産を賣却して之を教會に送り貧民を賑恤せしを以て道道を捨はざるの狀況なりき而して此等の信者は天主の聖言に隨ひて祈りを怠らず誠心誠意御聖體の祭りを拜禮し使徒の説教を拜聽す是等の信徒等始めは單に現世の逸樂をのみ事としたりしが翻て信者たりし後は翻然として謙遜柔順節操貞淑の良民と化し現世の財貨を抛て只管天國の

樂を享けんことを希望し天主に身命を捧げて敢て生命を願ふこと無さを覺悟せるの状況なりと云ふ可きか。

△使徒等は猶太人より苦痛を受けたることなきか

大なる苦みを受けたり即ち猶太人の司祭等は此の聖くして而も無罪なる宗教を無視して意とせず反て瀆冒を違ふのみならず甚だしきは使徒等を鐵窓に繋ぎ固圀に呻吟せしめ或は鞭撻を加へ之を苛責する等大苦痛を興へたること言語に絶せり然れども使徒等は基督の爲めに苦痛を受け又は罪深き凡人の救ひの爲めには身を殺して以て仁をなすは素より大に望み且つ期する處なるにより凡て尙一層の勇氣を増し愈福音を布くことに勉勵せり此の時使徒等は七人の助祭を撰みしが彼等の暴行の爲めに助祭ステファノは石を以て頭を破碎せられたり基督の爲めに殉死したるは實に此の聖人を以て嚆矢とす其の後幾何ならずして使徒中の一人なる聖ジャコブは斬首せられて殉死したり聖ペトロも聖ジャコブと同刑に處せられん筈なりしが其の前日に當り天使の導により獄より出るを得幸じて難を遁がるゝことを得たりき

△ポーロは何の奇蹟により信者の迫害を止めたるか

ポーロが初め公會に歸らざる以前は名をソーロと呼べり聖ステファノが石にて毆殺せらるゝときは之に加擔して衣服の番をなしたり此のソーロが斯く信者を迫害したるは決して己の本心にあらざり只管舊約を守らざる可らずとの熱心より出たるなり此の意より信者を悉く獄に投せりと、其の後ちソーロは信者を迫害せん爲めダマス市に赴かんとする途中赫灼たる光はソーロが身を圍めり其光りは太陽の光より尙赫々たりしなり而して天に聲有りて曰くソーロ、ソーロ、何故我れを迫害するか我れはナザレトのイエズスなり吾弟子を虐待するものは即ち我を虐待するに等しとソーロは此の聲を聞きて大に驚きて地上に平伏し戰慄して答て曰く主よ我れは如何にして可なるかと又天より聲ありて曰く起てダマスの市に入れ去らば我汝に其の爲す處を教ふ可しとソーロは此の聲を聞きて起ちてダマス市に入らんとしけるに兩眼盲して歩むこと能はず傍なる友人に援けられて僅かにダマスの市に入りたりしに兩眼初めて明を得たり是に於て始めて改悛し請ふて洗禮を受け福音を宣べ傳ふるに及たり衆此の景光を見てポーロの舉動

怪しきを疑ひしがポーロは少しも之に恐るゝ色なく猶太人を論駁するに聖書を以てし古來預言者の言は皆な此の天より降遣されたる基督の事蹟に適中するを以て此基督こそ眞の救世主なることを證論したり。

△異邦人中誰か初めて基督教に歸依したるや

又たセザレに於て羅馬國の百夫長コルネイと云ふ人なりし此の人は熱心に天主に奉事し貧民を賑恤すると夥し一日祈りをなし居たる時天使之れに顯はれて告げけらく汝の祈と貧民恵恤の心は天主之を知れり故に汝に賞を附與せらるべし即ちジョツペーの地に人を走せよ此の地に於けるペートルと云へる人は天主の道を教ゆるに最も適當の人なれば此の人に就き汝が何をなす可きかの教を乞ふ可しと茲に於てコルネイは三人の僕をジョツペーに遣したり此三人の使者漸く其の地に近きたるときペートルは夢に信者となるは只猶太人のみならず異邦人と雖も信者たる事を得べしとの告を受けたり是に於て彼の三人の使者の來るに遭ひたるを以て之を伴ひセザルなる異邦人の地に至るに及べり。

此の時恰もコルネイ百夫長は親戚朋友等を招き居たりし折柄なりしがペートルの來るを見て其前に跪拜せりペートルは之に起つことを命じて曰く起よ我も亦汝等と等しき人間なりと而して集會者に向つて基督の在世中の教旨言行奇蹟等を悉く説き聞かせたり此の説教の未だ終らざるに聖靈に感じること顯著にして直に諸國の語に通ずる恵を受けたり茲に於てペートルは之等の人々に洗禮を授け信者たらしめたり是れ異邦人の初めて公會に歸依したる權輿なり。

△使徒等は唯猶太國のみに於て布教したるか

否世界萬國に布教したり最初に於ては唯猶太國のみに蹤跡を止めしが世界萬國に向て普く福音を傳ふるは主の聖意なれ遂に猶太國の頑固暴戻の爲めに使徒等は萬國に別れて布教するに至れり即ちペートルは初めシリアに至り夫より羅馬に至りて教を弘めポーロは初めアラビア、小アジア、マセドニア、希臘等を巡教し終りに世界の都なる羅馬に入りてペートルと會合せり其他トマスは印度ジョアンは小アジア、アンドレはシットファイリツポは大アジア、バルテレミーは大アルメニア、マテオはベルシャ、シモン

はメンボタミア、ジュダはアラビア、マチャスはエムオピア等を巡教せり依て看るときは基督の十字架上に刑せられし後ち未だ幾何の歳月を経ざるに基督を拜するもの饒多なるに至れり。

△使徒等は口舌のみを以て布教し著書を以て布教したることなきや

有り新約聖書即ち是なり此著書はジョアン、マテオ、ルカ、マルコ、の四人なり又ルカの使徒行傳、ポーロの十四の書簡ジャコボの一つの書簡ペトロの二つの書簡ジョアンの三つの書簡ジュダの一つの書簡其他ジョアンの黙示録等を合して新約と云ふ也。

△初めて信者全體を迫害したる主動者は誰なるか

之即ちチロン皇帝なり皇帝人爲り残忍暴虐殆んど狂者に異ならず或日大火を觀んと欲し羅馬府十四郡を焼き拂たり然るに畢意此行爲は野蠻の所爲たるを免れざるを以て暴戾殘虐なる皇帝も衷心聊か恥づる處やありけん己れの罪惡を信者に諉せんと欲しポーロが帝の宮殿の中にまで信者の普及を見るに至りたるを憤りて之に罪を負はせたり而して信者を迫害するに當り通常成規の刑罰にては未だ慊焉たらず更に残忍苛酷の方法

を發見したり即ち信者に獸の皮を被らせ犬をして之を噬殺さしめ或は全身に松脂を塗擦し夜中之に火を點じて遊戯場に放ち以て燈火に代ふる等其の野蠻にして殘忍なること實に名狀すべからず此の際ペトロポーロも捕はれてマメルチンの獄に繋がれしが獄内の囚人四十七人及番兵等は之に感化せられて信者となり洗禮を授けらるゝに至れり而してペトロポーロの二人は死刑の宣告を受けペトロは十字架に磔せられんとしたるが身を以て御主の如く十字架に磔せらるゝの價値なしと乞ふて倒さまに釘付られて刑に處せられポーロは斬首の刑に處せられ共に殉死したり時に紀元六十六年六月二十九日なり。

△猶太人は基督を十字架上に磔したるに依り大なる罰を受けしにあらずや

然り罰を受けたり元來猶太人は羅馬に服従することを忌むにより此の事件は實に叛旗を揚げてゼルザレム其他の市を掠奪するの導火線となりたるなり吾主は滅亡を預知し之を預言せられたりしによりゼルザレムの信者は災害起るに當りて既に此の地を出で御主の言の如く難をペラーに遁れたり其の後ゼルザレムの猶太人中に内訌を生じ互に

黨を樹て、相争ひければ羅馬の將軍ベスバジエンは彼等の争闘を以て所謂鵠畔の争ひとなし彼等の自滅を俟て漁夫の利を得んと大に之を利せんとせりベスバジエン將軍は皇帝の位に昇りたれば皇太子チチユスは命ずるに己に代りてゼルザレムを攻撃するを以てせり皇太子チチユスは時期に乗じてゼルザレムを攻圍し敵の糧道を絶ちたり時宛も逾越の祝日に當りしを以て多くの猶太人はゼルザレムに集合したりしが此の圍に相遇ふて市中皆な飢に迫れり是に於て百方城中の飢渴を隣せんと離せれ共終に其の道を得ず而して敵は之を恤むの色なきのみならず攻撃は益々急なるを以て城中愈窘窮を極め或る一婦人は其の愛子を刺して其の肉を煮りて之を喰ふの慘狀を見るに至れり皇太子は此の時機に乗じ先彼れが砲臺を陥たり時に皇太子チチユスは軍隊に向て決して聖殿を毀損す可らずと命せしに一兵卒過つて火を投せしが爲聖殿は遂に灰燼に化し去れり此の活劇は基督の預言するところにしてチチユスが注意も之に勝つこと能はざりし此等の活劇はチチユス自から己れの力らに非らずして畢竟天主の聖力によりたることを承認したり此の役に猶太人の死に至りたるもの百十一萬の多きに及び他の猶太

人は奴隸の如く萬國に賣渡され苦役せらるゝに至れり此の時より猶太人は基督の預言の如く諸國に散亂し天子もなく國もなく遂に世の終りに及びて十字架の上に死せられし基督は眞の救世主なることを悟りて信者となるに至らん。

△第一の迫害後第二回の迫害はなきか

有り羅馬皇帝ベスバジエン及びチチユスの時信者虐待の事件平穩に歸し後位を繼ぎたるドミシエンの時に至りて再度信者を迫害するに及びり此のドミシエン帝は稟性情慾深く之れが爲め遂に信者を嫉み命令を頒布して信者を迫害するに至れり此の状態は該帝の近親に至る迄殺戮せらるゝを以て察するに餘りありと云ふ可し此の迫害の時に當り最苛責を受けたるは聖ジョアンなり此の聖人は羅馬に於て沸騰したる油釜の中に投入せられたりと雖も奇蹟によりて難を免るゝを得たり後バツモーズ島に放逐せられたる時謫所に於て黙示録を作りたり時に紀元九十三年なり其の後ドミシエン帝は薨せられてよりエフエーズに歸り百歳の高齡に達して天命を卒へり。

△トラジアン帝の御宇に於ける第三回の迫害の状況を語れ

トラジアン帝は良政治家として名聲高き人なれども惜い哉前帝に倣ひて信者を迫害するの命令を發せしは實に一世の欠點と云ふ可し然れども斯く歴代信者を迫害するは果して基督教に如何なる罪科あるか將無罪なるかはピチニの知事ピリンがトラジアン帝に建白したる書を見て知るべし此の書は以て信者の無罪なるを証明するに餘りあり書中信者の風俗に就て曰へる語に基督信者の誤りとすべきは基督を讚美する爲に讚美歌を唱ふにあり而して此等の者は夥しく増加して職身上の如何を問はず貴賤となく上下となく寺院の偶像を拜せざるに至れり又之れ等のもの、風俗は潔白にして毫末の罪を犯さず、トラジアン帝は之に答へて曰く信者を探索す可らず然れ共其証據充分なるものに至りては之れを罰すべしと此の帝の言の如きは、實に奇怪なりと云ふ可し何となれば信者を探索す可らずと云ふ以上は既に其の無罪なるを知るもの、如く証據充分なるに於ては之れを刑罰す可しと言へば又有罪なりと認むるが如し

此の帝の迫害に於て殉教したるはアンチヨシユの司教聖イギナスにして獅子の群に投せられて死したり今一人は聖シメオンにして基督の親戚たり其の齡百二十歳にして殉

死したり時に紀元百十四年なり。

△第四回の迫害は何に原因するか

之れ即ち異教人が信者を讒言するに因るなり時の帝マルコレルは此の讒言を知りつゝ、迫害の命令を頒布したり時に紀元百六十二年なり最初の地はスミルテにして其慘狀言語に絶せり即ち筋骨露はれ臟腑の出る迄で鞭撻を加へたるが如きこれなり斯く殘虐に遇ふと雖も信者の信仰益々堅固にして死に赴くと歸するが如く自から刑場に進みて一度び口を開けば即ち唯天主を讚美するのみ此の迫害の時に當て最も有名なるは一人の若年者にして勇氣を以て他の信者の龜鑑となりたり之れゼルマニツク其の人なり彼れ自から獅子の群に躍入りて殉教せり其の死する前に於て知事の訊問を受くるに當り知事が基督教を棄てん事を勸告したるに答て曰く千百の生命ありと雖も基督教を棄つるより寧ろ死するに如かずと遂に獅子の群に入りて投身して死したり他に一人の有名な若者はジョアンの徒弟たるスミルテの司教聖ポリカルブにして火刑に處せられて死するの榮を得たり。

△第四回迫害の中止したるは何に因るか
之れ即ちフィリミナン軍隊の奇蹟によるなり。

ナルコレル帝は野蠻人と交戦して遂に野蠻人の軍に圍まれたる爲め水に欠乏を告げたるにより乃ち天主に祈りて水を求めたりしに天俄かに曇り沛然として雨降りければ帝の軍隊は辛ふして渴を醫することを得たり初め帝の軍隊が跪きて雨を祈るに當り野蠻人は之を見て嘲笑したるに天俄かに暗黒となり沛然として羅馬軍營に降雨したれば渴きたる兵卒等は皆な仰で口を開き之れを飲みたり其の狀病雀花を啖みて飛騰の翅を搏つが如く驟雨を得て喙の吻を潤すに似たり野蠻人は之れを見て好機會に乗じ一齊に攻撃せんとしたるに怪むべし野蠻軍方面には巨雹頻りに降り電光大に閃き之に遮られて反て大敗を蒙り茲に於て信者の軍は大に勝つを得たるにより名づけてフィリミナン軍隊譯せば光輝軍隊と云へり此の奇蹟によりて皇帝は信者を迫害する事を廢止し紀念の爲め塔を建立し其の塔面に此の狀況の圖と彫刻し及び其の顛末を詳記したる文章をも彫刻して後世に傳へたり時に百七十四年にして此の塔今尙存せり後ち三年を経て

帝は以上の天恩を忘却して再び信者を迫害することを許可したり。

此の迫害に於て殉教者有りし地はコールなりリオンに於て聖ポテン、オーテンに於ては聖センフオクエン等なり。

△セブチームセベル帝の治下に於ける第五回迫害の狀況を語れ

セブチーム、セベル帝は其の初め信者を撫慰するの方針なりしが即位の後十年を経て迫害の方針を探るに至れり而して其の虐待の甚だしかりしはゴールなりゴールの内なるリオンに於てはポリカルプの弟子聖イレテ殉教したり是より曩リオンはイレテの力らによりて大概信者となりたるによりセブチームセベル帝は之れを憎惡すること甚だしく遂にリオンを圍むことを命じ而して信者たることを自白するものは悉く之れを殺害す可しと命じたり是に於て聖イレテは尋問を受けて遂に死刑に處せられたり故にセベル帝は羊と牧者とを共に殺戮したりと云ひて大に喜びたりと云ふ斯の如く帝は多數の信者を殺害したるの證左は其の後ちリオンの聖堂の門に銘刻したる所を見るも婦女小兒を除くの外大人の殺害せられしもの實に一萬九千人の多きに達せりと云ふ

其他亞非利加の都なるカルタージュに於てはペルベチユス、フェリシテの婦人等は多大なる信者の群集を共に殉教したり實に甚だしき暴虐と云ふ可きなり。

△信者は苦痛を受け或は讒言せらるゝも之れを辯解するものなかりしや

有り信者は唯苦痛を受くるのみならず異邦人は國家の敵なりしと或は其他凡ての罪科有りと訴えられしに帝は其の罪の有無を審査せず偏に之を撲滅せんとせり是を以て天主は御恵を垂れて是等の無罪者を辯解する爲めに博學なる人才を輩出せり即ち聖ジュステン其の人なり此の聖人は二個の辯解書を皇帝に奉呈したるに依り爰に初めて基督教は真正の宗教なることを覺りて異邦人の信者となるもの多く之れが爲めに聖人は反て殉教するに及びたり。

△其の他に有名なる辯解者有らざるか

有りテルチュリエンにして此のテルチュリエンは亞非利加のカルタージュの教會の神父なりしが信者を迫害するは無法にして教會に基督の自ら建立せらるゝものに係り其の教ふる處は真正にして完全なることを證明したり又其の力に依りて信者を讒言するこ

とを止めたり其の辯解に曰く異邦人は信者たるものが皇帝に謀叛し國家の忠害なりと訴ふれども何れの時之れ等の行爲ありしか反て吾々に向て異邦人は石を抛ち家を焼き甚しき苦痛を與へて遂に之れを死刑に處せり斯く彼等は自から讐を求むれ共信者は此の讐を報ずる爲めに何をかなしたるや又吾等にして若し公然戦を開かんとせば吾等に軍備の足らざる憂ありとするか否々吾々は世に出でて未だ久しからずと雖も市邑軍營宮殿議院等に至る迄業に既に之を満たせり唯だ吾等に必要なしとて探らざるは寺院のみ他は皆な之を占有せり然るに吾等は決して異邦人を相敵視すること無く又干戈を交ゆることをなさず是れ畢竟勇氣なきが爲めか否決して然らざるなり吾々の規律は決して他人を殺すを容さず反て自ら進んで他人の爲めに殺戮せらるゝものなり汝に讐を報ゆるに吾々の手を須ひず單だ帝國を出で都城を去りて、之を寂寞荒涼たらんを以て報酬は足れり汝は必らずや既に此の境遇に達したるを恐るゝが故に吾等を迫害するものならん。

而してテルチュリエンは信者の集會は何を爲すがためなるかを説明して曰く我々の集

會するは衆と共に天主に祈らんが爲めなり吾々は財産あるときは之を以て貧民を恤す可きものとなす又吾等は一心同體の如く互に相扶助せり斯く相親密なるもの集會して互に樂み互に會食するは人として此の樂みを翼はざるはなし故に吾々も此の事をなす即ちアガブと名けて愛するの意なり此の會食たるや貧富の差別をなさず食事中は恰かも天主の御前にあるが如くなし祈によりて食事を初め祈りを以て之を了る右等の舉動により罪となるべき行爲果して何れにあるや裁判官諸子よ閣下常に罪人を審判す而して信者にして罪人たるもの幾許有りや乞ふ速かに判決簿を審査して吾れに語れ吾は必らずや信者有ること無しと斷言するに躊躇せず故に又た必らずや吾が無罪なることを斷言するに憚らざるなり神なる裁判官は閣下に優ること遙かにして僞ることなく欺くことなき最も公平無私に賞罰を與ふるものなればなりと以上はテルチュリエンが辯解の大要領を摘記したるものなり。

△オリゼーヌの事を語れ

オリゼーヌは亞歷山に生れ父は聖レオニッドと云ひてセブチームセベール帝の迫害の時に當り同じく大なる苛責を受けたる人より此の人は其の子を涵養するに意を注ぎテオリゼーヌに俗學は云ふも更なり特に聖書を修めしめたり固より賢才のオリゼーヌのことゝて道德學業の進歩駁々として殊に著し而してオリゼーヌは殉教の榮を得て自から迫害の渦中に進まんとしけるを母は之を掣止すれども聽かず是に於て母は彼の着衣を奪ひて其の行を止めたり然れ共オリゼーヌの家財は迫害の爲めに悉く掠奪せられ大に貧窮に陥り後ち亞歷山の大學校長となりたり其の以後再度迫害起るに際しオリゼーヌは信者を説て信仰を鞏固にして又捕はれて獄中に呻吟する信者を訪問し或は刑場を吊ふ等の働きをなし己れも遂に捕縛せられて囚獄の身となりたり其時獄丁等は充分に食物を給與せずと雖も彼は常に嚴格を守る習慣なれば比較的此等の苦みに感ぜざりしと云ふ彼の著書は汗牛充棟も管ならざりしが就中最も著名なるものは異邦人の哲學者を駁論するものにして大に有益の書なりと云ふ可し。

△マキシメン帝の治下に於ける第六回迫害の状況を語れ

セブチームセベール帝薨じて其の後嗣たる皇帝は常に平和を維持したり就中アレキサ

ンドル帝は信者を撫慰すること少なからず基督を神の如く尊敬して其の聖像を偶像と共に安置したり後ち帝崩じてマキシミアン帝は即位したりしが帝は性暴戾惡虐にして第六回の迫害を初むるに至れり併しながら這般の迫害は僅少の間に止まり亦甚だしき暴戾を極むるに至らずして止みたり帝は即位後未だ幾何ならずして近衛兵の爲めに弑せられたり時に紀元二百三十七年なり。

△第七回迫害の状況を語れ

第六回迫害の後ち十三年を経てデス帝は第七回の迫害は始まりたり而して其の迫害は最も甚だしかりしなり即ち鞭撻を加へ或は松脂を塗擦して火刑に處する等慘狀言語に絶せり今回の迫害は前帝等の迫害と其赴を異にし重なる司教神父に向て教説を妨害し教誨を掣止したらんには他の信者坐ながら窘窮に陥らしむべしと即ち多く位階高き離俗者を苦めたり然れども信者の殺害せられたるものも亦數ふるに違わらずと云へり其の他此の難を避けん爲め砂漠に遁れ去るものも亦尠からず就中ポーロは世俗を離れて唯天主に祈り殆んど百年間も此の處に住したり。

△第八回迫害の原因は如何

之れ即ちバレルエン帝の妄信に出たるものなり帝は嘗て戦ひに臨み偶像教の僧侶が基督教を殲滅せざれば戦ひに勝つこと能はずとの勸告を聞き帝は之を妄信して俄然基督教を迫害するの命を發するに至れり此の迫害に於て殺害に遭ふもの多きが中にカルタージュの聖シーブリエン羅馬の助祭聖ロラン等も之に加はれり其の他有名なる殉教は童子シリルにしてセザレに於て殺害せられたり此のシリルの父は偶像教に熱心なる人にしてシリルに基督教を捨つべきことを命せしも敢て之に従ふの色無かりければ父は之を毆打し鞭撻を加へ遂に放逐したり知事は之をさきて兵卒を遣はし此童子を訪ふて曰く童子よ汝は童兒なるが故に其の罪を赦免すべきに依り今より斷然基督教を捨て善良なる童兒となれよと、シリル答て曰く吾は殉教するを以て最大の榮譽となす吾れ殉教せんとする爲めに仮令父の家を放逐せらるゝと雖も再び壯麗なる天國に住する快樂を抱く吾れは決して死を恐れず死後は有限なる現世に勝る涯り無き生命を得べしと、知事は此の勇敢なる言を聞き苛責を與ふる場所及び死刑の場へ連れ行き猛火中に投ず

るの状を目撃せしめ暗に彼れの反省を促したれども童子は神色自若として少しも恐るゝ態なければ再び知事の前に引出し問ふて曰く汝は他日賢明なる人とならんと小童シリル答て曰く吾を殺すことを躊躇して再び知事の前に引致す之れ吾れの爲め反て害なり、吾れは父の財産より遙かに優る財産を得んことを希望し天主より賞譽を受けんことを自から誓ふものなり速かに我を殺して天の褒賞を得せしめよと、この様を見る人々皆袖を窄りたり。

シリルは之れ等の者に向つて謂へる様君等は吾と共に歡ぶべきに反て泣くは何ぞや吾れは早く現世を去つて永界の福樂を享けんことを希ふものなり君等請ふ泣いて吾が祖道を阻む勿れと猶語を亞で曰く吾れは最大真正なる榮譽を受けむとす一刻も早く此世を去らしめよと自から刑場に至りて殉死せりと云ふ又壯ならずや。

△オレルエン帝の治下に於ける第九回迫害の状況を語れ

オレルエン帝は其の初めに於ては信者を迫害なさりしが待臣高官の勸めを容れて迫害するに決し既に其の法律案を裁可せんとするや雷轟然帝の前面に落つ帝大に怖れ

之れ天の責罰なりとし迫害を廢するに至れり然るに年を経て再び迫害を加ふるに至りしと雖も其の命國內に周らざる以前に崩禦せられたり時に紀元二百七十五年なり。

△第十回迫害の状況を語れ

此第十回の迫害は最終の迫害なれども以前の迫害に比し長期間に亘り殘虐も又其の極と云ふべし殘虐は實に紀元三百〇三年に初まりしが前代未聞の法を探れり即ち足を縛して倒釣となし其の下にて微火を燃し徐ろに焦死せしめ或は炮烙の刑に處し或は玻璃陶器の碎片を以て身體を搔割し或は爪に穴を穿ちて鉛の熱湯を注入しフリジ一國に於ては一市街を圍みて放火し老幼男女悉く焔中に葬らる等殘酷も亦甚だし人は是れを形容して曰く紅洪水の如しと初に迫害を加へし所は皇居なりしが信者なる官吏は基督教を棄て、偶像に饌を供せよと迫られたりしに依り自から官職を放棄し財産を抛ち且つ生命を天主に捧げたり、テベンと稱する一個聯隊は隊長モリソと共に全隊殺戮せられたり是等の顛末を摘載したる記録に依て察するも其の殘忍の度を推知するに餘りあり羅馬皇帝は代々公會をして雲煙に滅せんと計るも公會は愈々有勢の反動を示し來り皇帝

ば皆な苦しき最期を遂げらるゝより之れ天の冥罰なりとしコンスタン帝の代に至り基督に服従し虐待を止めしめしのみならず公會を扶け力を添へらるゝに至りたり。

△公會は斯く苦中に圍まれ如何に之を維持すること得しか又如何にして布教したるや

是れ信者言行の慎重なると財産を吝まらず互に相愛するに依り苦中に立つて布教するを得たり又奇蹟を行ふにより如何に頑固なる者にも基督教の真正なることを信認せしむるを得たり又強制的に之を奉せしむるの手段を探りしが就中異邦人をして驚かしめたるは信者が虐待せらるゝに當り少しも屈する色なく忍耐と勇氣とを以て其の苦み中に基督は真正の神なることを公然大語して教へを棄てざりし事是なり之れを見たる裁判官及び傍觀者は此の勇氣に感じて公會に歸依したるもの亦尠からず是に因て看れば信者が鮮血を流すこと愈多ければ又生れ出づるもの多くしてテルチュリエンの金言の如く殉教者の血は信者の種子なりと又た宜なるかな。

△公會が迫害を受くるるとき公會に反對する異端人は無かりしや

有り公會は其の初め迫害を受け信者が悲惨なる機に乗じ悪魔は公會初代に於て異端人を發生せしめたり即ち第一はシモンと云ふ魔術者なりシモンはペトロに謝金を出して奇蹟を行ふ權を興へられんとを求めたり然るもペトロは之を免さざりしに彼は之を含んで公會に反對せり而して多くの異端人を發生せしめたり、第二はモンタンなり此の派は其の規律嚴酷に失し必らず自から殉教せざる可らざるものとし而して又た公然犯したる罪科は悔悛自首するも決して赦さるゝことなしと主張せりテルチュリエンは終りに此の異端に流れたり第三はマーチスにして其の主説によれば神は二體にして善と惡とを具有すと此の異端は秘蹟偶像を尊敬せず及び主の御托身を信ずるとを禁止せり是等異端人を論駁する爲めには天主は博士を出生せしめたり此の博士等は多才にして多くの著書を以て異端人を駁し己が生命を抛て基督教の真正なることを證明せり博士の名はクレマン教皇アレキサンドリーのクレマン、聖イレチ、聖ジュステン聖シープリエン、テルチュリエン、オリゼーヌ等是なり

第二章

自三百一十二年
至四百九十六年

三十

第二期 コンスタンテン帝の勝利より佛國王クロビスの歸依に至る

△第三世紀間の迫害をして天主は如何に平和ならしめたるか

即ちコンスタンテン帝の勝利なりき公會は天主の親立にかゝるものなれば地獄の門は之に勝つこと能はずと云はれたることを明らかならしめんが爲めにコンスタンテン帝をして位に昇らしめ公會を平和に歸せしめたり。

マキサンスが羅馬國を侵畧し帝位を奪ひたれば之と戦ふ爲めにコンスタンテン帝を遣されたりコンスタンテン帝は基督教を信じて常に基督教を奉ずるを得るに至る心を開かしめしことを祈りしが此人元來正直なるに依り天主は之に向て恵を垂れられたり即ち或日進軍中快晴なる日に當て空天に十字架顯はれ輝くこと太陽より明らかなり其の架中に書してありけるは十字架の印を以て戦ふに於ては必らず勝利を得べしと。

兵卒等も之を望見して勇氣百倍し戦ひ大に勝ちマキサンスはチーブル河に於て溺死し

たれば直ちにコンスタンテン帝は羅馬に入りしに人民は大に歡迎し祝意を表したり。

△コンスタンテン帝が戦に勝ちて後如何なる勳を以て公會を扶助したるか

前帝の惡風を矯正し迫害の爲め放逐せられたるものをして羅馬に歸るを得せしめ破壊せられ焼滅せられたり聖堂を再建して壯麗なる裝飾をなし其の他雖俗者教父及び從來殉教したるものを尊敬したる等社會に一大變動を呈せるにより信者は深く天主の洪恩を感謝して喜び合へりと云ふ是を以て外教者は前帝の例を顧みてコンスタンテン帝の特に基督教を扶助するを見て大に怪みたりコンスタンテン帝に十字架の靈驗に依り勝利を博したるを以て帝の羅馬に入るや十字架を以て戦勝の徽章となし或は兵器帝の冠及び宮殿の上に迄十字架の徽章を付したり。

△平和に至りたるが爲め信者の信仰自然に淡らがんとする傾向あるより天主は如何なる方法を以て之を温め給ひしや

コンスタンテン帝の未だ信者とならざる以前と雖も公會の規則より事を處するにより其風習を見て信者となるもの頗る多しと雖も固より信心冷淡になると且つ平和の爲め

信者等は皆な信仰心温ならざるにより天主は之を矯正せんと欲し行者を出さしめ給ひたり此の行者即ち隠修士團を組成せしめたる者はアントニヨにして埃及國の出なる其の父は富豪にして熱心なる信者なり或日聖書の言を聽きたるに即ち云へらく完全なる信者たらんと欲せば其の所有の財産を抛ち之を貧人に施し而して天國の寶を受けよと之に感じて所有の財産を抛ちて貧者を賑し完成の言を味ひて遂に寂寥の地に隠れたり而して其の臥床は一粗筵にして地に起伏し食事は一日一回にして唯麩と水のみを用ひるに過ぎず身には獸皮の粗衣を着するのみ天主は之れに奇蹟の特恵を與へたるを以て徒弟たるもの頗る多し之より修士を組織して修道院を開始したるもの又頗る多きが故にアントニヨは從來の殉教者の如く尊敬せられたり。

△當時行者の習慣は如何

彼の修道士の目的たるや全く福音に従ふものにして貧窮を意とせず齋戒して常に寂寥の地に蟄居し孜孜として働らき祈禱を是れ専らとせり此の砂漠の地は元より草木稀なるを以て小屋を營み竹を以て籠を造り之を賣りて些々たる貨幣を得僅かに飢渴を凌ぐ

に過ぎず而して常に潔齋を守ること斯くの如くなるも身心の疲勞することなく能く長壽を保つことを得たり彼等は日に二回の祈をなし祈毎は必ずダビトの聖歌を唱ふる十二回斯の如く修院數多しと雖も大修院長有りて嚴格に之れを統禦す此等の修院は益々延蔓して止まず始めはテバイトに創立を見しよりバレスチナシリヤ希臘地方に波及するに至れり。

△悪魔は三百年の間公會に加害したるが其後又た害をなせしことなきや

偶像教は三百年間公會を殲滅せんとし無量の信者を殺戮したりと雖も己れ反て自滅に歸し去り公會の大勝利を博し益々盛大に赴きしが、其の後ち又悪魔は異端人を出して公會を倒さんとするに及べり、アリウスの時に至て公會を制するを得たり。

△アリウス派とは如何

アリウスは亞歷山教會の神父なりしが基督は神にあらずと主張し聖子は聖父と同性同質のものにあらずとの謬説を吐くに至れり此の説の如きは曾て聞かざる最も奇怪なる

説にして皆な之れを不快なりとし瀆聖なりとして忌むこと甚しけれども亦此の説に容ふもの無きに非ざりしなり、コンスタン帝は此の異端の蔓延を憂慮し教父に計りて公教議會を開き離俗者を召集して此の派の排斥を實行せんとす此の議會はニセに於て開會せられ集會したる者三百十八人にして、シルベスト法皇の使節たるコルドのオジュスの許に於て會議を開たり此の集會は最も尊敬を表すべきものにして曩に迫害の爲めに身に傷痕を帶ぶるもの多しと云へり而して基督が眞の神なることを議決したる時司教等は皆な帝の宮殿に入り帝は之を尊敬し尋で殿内に入るを許されたり此の時アリウスも共に昇殿して自説を陳べんとしたるに會集員の全部は忌みて耳を蔽ふる至りぬ而して集會は聖書と聖傳とにより基督は眞正なる神にして聖父と同質たることを決議し有名なるニセの信條を作りてアリウスを公會より放逐したり尙アリウス異端に加はりたるものは高貴の官吏と雖も容赦なく放逐して此の議會の終結を告げたり時に三百二十五年なり。

△アリウス派はニセの公會の決議に従ひたるか

異端人の特徴は詐りと頑固なりアリウス派に屬するものはニセの公議會に於て駁せられ放逐せられたるにより仮りにニセの決議に隨ひたるもの、如く装ひたるを以て一時公會の赦を得て歸依したりと雖も歸依して後コンスタン帝が公會の司教神父を捨つるに至らしめんとせり、亞歴山の司教聖アタナスはアリウスの讒言によりて帝の放逐する所となりアリウスに屬するものをして聖アタナスに代て亞歴山の司教たらしめたりコンスタンテン帝の子コンスタンス、父の位を嗣ぎてよりアリウス派に加はりニセの公議會に對峙する爲め偽議會をリミニに於て開きたり此の議會に於て更らに信條を作り其の中に(同一)の文字を缺くのみにて敢て異端と認むべき所なければ公會の司教等は之に認印したり然るにリベロ法皇のみ之を不可なりとして拒絶したるを以て公會は手を勞せずして勝つことを得たり。

△ジュリエン帝は偶像教を改革再興せざるか

ジュリエン帝は基督教を捨て、偶像教を改革再興せんと試みたり而して基督教は眞正の宗教に非らずして謠偽なりと云ふ説を信せしめんが爲めに基督がゼルザレムの聖殿

は遂に其の礎に至る迄亡びんと言はれし預言を水泡に歸せしめんと企て職工を使用して聖殿を建立せんとしたるに地中より猛火噴騰して遂に工事を果す能はずジュリエン帝が行動は反て基督の預言を桃發し全く預言の的中を見るに至れり時に紀元三百六十二年なり斯くジュリエン帝は失敗したるに拘らず基督教を敵視する事を憐れず曩に三百年間羅馬皇帝が信者を迫害したるも一つも其の効を奏せざるに鑑み這般は公教人と異端人との間に不和を醸さしめ以て基督教を滅亡に歸せしめんとす即ち離俗者の財産を悉く沒收し信者たるものは官吏たるを得せしめず信者たるものは如何に加害せらるゝも起訴權を有せざる等の法律を制定せり而して又た信者を嘲りて曰く信者たるものは現世の財産を天國に携へ行くとを得ず故に財産は無益なりとし又信者に俗學を修むることを禁止し笑ふて曰く信者は學問を要せず唯だ信仰あれば可なりと何となれば信仰によりて天主の救を得らるればなりと此のジュリエン帝が信者に對する法律の如きは殉教せしむるより其の害大なれ共幸に天主の恵によりて僅か二年の後ち帝の崩御と共に免かるゝを得たり帝ベルシヤ國と戰ふに當り流矢に當り出血淋漓たりしが帝は其

の流血を掌中に掬し天に抛ち仰叫て曰く基督よ汝は終に吾に勝てりと終に蕩す。

△四世紀に於て異端を駁する爲の博士は出ざりしか

出たり即ち前にも其の名を記したる聖アダナスなり其外コールに於てはツールの司教聖マルテンなり説教により將奇蹟に因りて此の地の偶像教を滅亡せしめたり又君堡の司教聖ジョアン、クリゾストモは能辯家なるにより人呼で金の口と名く又ミランの司教聖アンボロジヨ、ボチエの司教聖イラリヨは東方に起りし西國に傳播せしめざることに力らを盡したり又セザレの司教聖バシロナシアンズの司教グレゴリヨ等皆な大に異端を駁せり。

△マセドニユス異端の事を語れ

アリユス派は其の勢力衰へたり其後ちマセドニユス異端は起れり此のマセドニユスは君堡の司教の位を掌たり此の派の者は嚴格なる規則を立てたるを以て少許の加入者は有りしと雖もテオドス帝は羅馬の聖座に服従し熱心なる信者なりしを以て一つの命令を發したり即ち眞正の信者とは法皇に服従するものを指す服従せざるものは然らずと

而して東方の司教を君堡に召集し議會を開き此の議會に於てマセドニウス派に對し公會へ歸順す可きことを勸告することに決し之を實行したれども敢て従ふものなかりければ遂に絶交を宣告せり而してニセの信條を確め尙聖子に就て加へたることを聖靈に付ても加ふることゝなしたり、テオドス帝は此の公議會に於て決したる事項は國法に同じく必らず遵守す可しと命を出したり此の議會は東方人のみの集會なりしと雖も教父は之を允許したるにより公議會と名けたり時に三百八十一年なり。

△四世紀に於てアフリカに異端有らざるか

有り之れドナチスト派の異端なり此の派の起りは初めカルタージュの司教セシリエンは眞正の司教たるか否に就て争ひを起せり或人は之を眞正の司教に非すとなしトナと云ふ人を撰擧して司教となせり是に於て教父は之を審理してセシリエンを以て眞正の司教たること明かなりと裁定を下したるにドナは之に反對して聖堂を壞り祭壇を破り一度洗禮を受けたるものに向て再度洗禮を施したり此の異端を駁せし人は聖オグステンなりドナ派は頑瞑にして暴擧を企て敢てオグステンを殺害せんと謀りしが事遂に成

らず公會の司教は何れが眞正なる司教なるかを區別せん爲め公異兩造をして論議せしめんとし各七人の司教をして論議せしめしに羅馬法皇に服従せざる可らざることに決したれば公會の司教はドナチスト派の司教に向ひ若し異端を棄れば我黨の司教は職を辞し汝を以て眞の司教に任せんとオグステンは約せりドナは之を用ひざるに依り人民等は其の頑固執拗の甚だしきを忌み異端を捨つるもの多きに及べり是を以て終に平和を見るに至れり。

△ペラージュ異端のことを語れ

ドナチスト異端次第に其の跡を絶つに及び又た一個の異端を出せり是れ即ちペラージュと云ふ人なりき此の異端の説に據れば原罪は後昆に傳はらず又天主の恵みは善を行ふ上に就て無益なり唯人間を以つて善事を行ふを得べしと云へり聖オグステンは之れを駁せり故にカルタージュに於て分教會を開き此の會の決議事項を法皇に呈出せり法皇は調査の上之に認印しペラージュを公會より放逐したり時に紀元四百十八年なり之れに就き聖オグステンは言へること有り、羅馬法皇一度び口を開けば紛議全く終りな

りど。

△公會がペラージユに勝ちたる後他に異端は出ざりしや

悪魔は地獄に落つるも尙人心を試ることをなせり即ち初めにマーチスの異端を以て天主は一體なることに反対しアリユス派は基督の眞神なることに反対しマセドニユスは聖靈の天主なることに反対しペラージユは天主の聖寵に無益なりとして公會の教説に反対せり雷に夫のみならずマリアは天主の聖母たると基督は人間の性質を受けたることに付て異端人を發生せり即ちネストリユス、とユチケスの二人是なり。

△ネストリユスの異端は如何

公會の教説は基督は肉身と神の性質を有したるものなり例へば人は肉身と靈魂とを備ふる如く二性一體のものなり故に聖母マリアは此の二性一體の基督を産みたるものなれば天主の聖母とも云ふ可きものなりと説けり而して爰に君堡司教ネストリユスは天主には二つの（ペルソナ）にして聖母マリアは唯基督の母と云ふ可きものなりと主張せり此の説は君堡の大天主堂に於て發言せり信者は之を聞て駭くこと甚しく耳を聳し

て其場を退けりアレキサンドルの司教聖シリルは直ちに之を駁しセレステン法皇に訴へたり法皇は之が審査を命じ且つ異端を棄てざれば放逐の罪を宣告す可しと嚴命したりネストリユスは容易に歸順するの色なく反て之が傳播に盡力したるを以て法皇はエフエーズに於て公議會を開催したり聖シリルは此の議會に於て法皇の使節となり議會を支配し議決に因てネストリユスに絶交を宣告したり是に於てマリアは實に天主の聖母たること故の如くなりしに依り人民等は此の決議するや大に歡喜し直ちに門戸に國旗を揚げ軒端に提燈を釣し以つて大に裝飾をなし祝意を表したり之れに反して君堡の司教たりしネストリユスは放逐せられて埃及地方に遁れ而して彼の舌を靡爛し憐れ果なき死を遂げたり。

△ユチケスの異端は如何

ユチケスは君堡に於ける或る修道院の長なりしがネストリユスの異端を駁する爲め知らず識らず一つの異端に墮落したり即ち基督は只眞神の性質のみを有し人間の性質を有せずと君堡の司教聖フラビエンは温言を以て異端を棄てんことを忠告せしにユチケ

スは此の忠言を容れざるにより止むを得ず法皇と相謀りカルセドゥエンに於て第四回公議會を開くに至れり此の議會に參集したるもの六百三十人の多きに達せりレオン法皇は使節として勅書を齎らし其の罪を宣告し而して尙ほ布達書を各地に發してユチケスに罪を言渡したることを報告せり司教等此の法皇の勅書を見て異口同音に稱へて曰く吾れは是を信せり信せざるものは絶交せよとマルシエン帝は前帝コンスタンテンがニセの公議會に臨みたりし如く帝も亦此の會議の結了に當りて臨賀の榮を賜ひ司教等に向つて決議の條件を遵守せんことを勵まされたり。

△此の異端人を駁する博士なきや

有りアレキサンドルの司教アレキサンドルなり又聖ゼロームは語學家にして聖書の濫奥を極めブルカッドと云ふ聖書の翻譯をなせり又聖オギステンは偉大なる天才家にして異端人は其名を聞き恐れ戦くと云へり又聖レオン法皇は天主の力らを以て以太利及び羅馬府を援け終りに及でアツチラ會長を遠けたり。

第三章

自三百九十六年
至八百

第三期 佛國王の公會に歸せるより回々教の始めに至る

△佛國王クロビスは如何なる動機によりて信者となりしや

クロビス王はクロナルドと婚姻してよりクロナルドが熱心なる信者なりしにより屢宗教のことを王に談せられたり王は喜んで之を聞きしが容易に信者となるべき傾向なかりし或る日クロビス王はトルビヤクと交戦し王の軍敗恤に歸せんとする景光ありたればクロビス王は偶々皇妃の談話したりし天主のこと心中に浮びたり是に於て天主を拜して曰く天主よクロナルドの常に語りし天王よ若し此の戦ひに勝つことを得るなれば吾は天主の信者となり決して他の神を拜せずと時に戦況一變して大勝利を得たれば王はクロナルドが常に語りし天主は真正の神にして今回の勝利も必らずや天主の力らに由るものなりと軍隊に語りし故に王は三千人の兵を卒てレンスに至り聖レミー司教に教への導きを乞ひ兵士と共に洗禮を受けたり時に四百九十六年十二月二十五日聖主降

誕の祝日に當れり斯の如く此のクロビス王が公會に歸依したるに依り公會の喜びも推知するに足るなり嗚呼他の帝王は皆な異端に墮落しけるに一人此の王のみ公會の信者たるは喜び限りなしと云ふべし。

△此の時有名なる聖人はなかりしや

有り巴里に於ては聖ゼノベフア以太利に於ては聖ベチデクトなり此聖人は西方に於て修院を映盛ならしめ修院の親とも云ふ可き人なり若年の時代は洞穴に蟄居し三年の後ち人の見出す所となり多くの弟子は此の聖人を欽慕し其の膝下に蟻集し遂に十二個の修道院を建立するに至れり就中有名にして本修院とも云ふ可きはカシン山の修院なり初め聖ベチデクトが此のカシン山へ來りし時偶像の寺院は尙ほ存せられ人民は多く此の偶像を拜せり聖人は此の偶像を破壊し人民を説て悉く信者となし天主の恵みによりて預言奇蹟を行ひ而して行者に對する修院の規則を確立し西方一般の修院は此の規則を應用するに及びたり。

△第五回公議會は何故に開かれたるか

此の集會の理由は彼の三書に基けり始め彼のマルシエン帝の存在中はユチケスの異端衰へたりと雖も帝崩じてより再び頭角を顯はすに至りしかばカルセドウエンの公議會に於て其の罪を宣告し遂に公會より放逐せられたり然るにチチウスは大に此の公議會の決せし規則を忌み之を無視せんと欲し乃ち之れを瓦解せんとするの企をなすに至れり則ちユチケスの異端の著書にして此の書はユチケスの異端を含みたること勿論なり之を三書と稱せり而して此の書を著したる人はカルセドウエンの公議會に於てユチケスの異端を放逐せられたる當時三書中の異端を棄て、公會に従ひたりしを以て此の三書に就ては別に罪の宣告をなさず之を不問に付したりしが後ち是を理由として議決の諸件を排斥せんとしたるものなり即ち彼の三書に就き罪を宣告せざりしを以て之に罪の宣告あらんことを教父に願へり若し此の願を容れて教父が三書に罪を言渡すときはカルセドウエンの公議會の決議は誤謬にして従つてユチケス派を放逐し罪を宣告したることも誤謬なるのみならず其の他の事も皆な誤謬なることを主張して公會の過失を現はし之を冒瀆せんとせしむ教父は既に能く彼の隠謀を知り三書の罪を宣告せざりし

なりユチケス派は強て三書を罰せんとし議論囂然たりしを以て教父は君堡に於て第五の公議會を開會するに至り遂に三書に罪を宣告するに至れり而してカルセドゥエンに於て議決せし事項を確かめたるは紀元五百五十三年なり。

△第六世紀に於ける公會の進歩を語れ

第六世紀に於て公會は大に異端人の領地及び偶像教の隆盛地に向つて進入したり西班牙國に於てはビジゴ、以太利、ロンバルゴール、ブリジジョン等は既に基督教を奉じたるも未だ真正なる基督教を奉ずるに至らずしてユチケス派を信じたるも六世紀に及んで遂に公會に歸依したるのみならず偶像教の地に於て基督教を見るに至れり殊に英國は二世紀の頃サクソン人英國を占領する迄で基督教を奉せしが其後ちサクソン人が偶像教を傳來してより偶像教を奉ずるに至りぬ而して六世紀の終りに至るに及んで大聖グレゴワール法皇は四人の宣教師を英國に派遣したりし聖オグステン其の人なり此の四人の宣教師は多くの信者を歸依せしめしのみならず帝王も其の奇跡と徳道に感じて遂に信者となるに至れり時に紀元五百九十七年なり斯の如く新布教地の隆盛を見るに至

りたるを以て法皇は聖オグステンに司教を授けカントルベリの司教に座したり夫れより天主の恵み益々顯著にして説教の爲め日々一萬人の信者を見るに至りたれば法皇は益々宣教師を派遣して布教に盡力するのみならず英國より羅馬に留學せしめ卒業の後ち再び英國に歸りて布教に従事せしむるの方を取りたり之れ英國に於ける公會の盛なる状況の一端なり。

△回々教の起原と其の傳播は如何

七世紀の初め即ち紀元六百二十二年の頃惡魔は一主國を建設するの野心ありしが偶々東方に於て離教異の徒發したるを以て天主は之れ等のものを征せん爲め惡魔は一つの異教を建つることを許したり是即ち回々教の發生したる機會なり回々は從來詐りを以て公會を害したり回々は強慾アブラハムの子イスマヘルの子孫にしてラメツクに於て誕生す爲人強慾虚偽多し四十歳にして自から預言者と稱へ又天主の使者なりと稱したり共素行修らず風紀不良なるを以て人皆な神の使者ならざるを知り之を捕縛せんとしたり回々は遁れてメジンに至り僅かに免るゝを得たり時に紀元六百二十二年なり回々

は朋輩の扶けを得てメシンの市を取りて夫れより盛に布教するに至れり此の宗教は偶像教基督教猶太教の混合したる者にして一個の怪たるに過ぎず回々は教育なく讀書の素養なきを以て背教者なる修士の手を借りて著書となす此の書を名けてコランと云ふ回々は癡癩病者にして時々不意に轉倒す此の時天主は大天使ガブリエルを遣はし默示を垂れて眞の宗教を指導せらるゝと云へり或人之に語て曰く汝は天主の使者なれば奇蹟を行へど回々答へて曰く我れは奇跡を行ふ爲めに此世に來らず劍を以て全世界の人民を信徒と化す可しと而して多く盜賊及び無賴の徒を集めて參詣人を掠奪し又有名なるメツカと稱する參詣人の最も多き地を掠奪したり其の後アラビアを略取し此の國民を自宗に入らしめたり回々の後繼者は其の布教進歩速かにしてアフリカ・亞歷山セルザレム等を侵畧し尙進で埃及の都なる亞歷山を略奪したり此の亞歷山は學問の都府とも云ふ可き處にして昔より大學校の設有りて學藝大に進歩し基督の信者も亦隨て多く古來の歴史は積で文庫中に充ちたり回々は之を火に投じ悉く燒失し盡して曰く此の書は我がコランと異なる點多し若し之と異なるときは甚だ不可なり若し夫れ之れと同一

なるも亦不可なりと而して又亞非利加の北部に侵入しカルタージユの教會其の他有名なる教會を掠め遂に西班牙國に進入して佛國に入りポチエに進みシャルロマンニユ帝の擊退に依り衰退するに至れり回々教布教の法たる恰かも左手にコラン右手に劍を持ちたるものゝ如くコランを信せよ信せざれば殺すと云ふが如し故に世界に害毒を流したること實に尠なからざりしなり。

△モノテリト(一つの聖意)とは何か

モノテリトはユチケス派の殘黨にして曩にユチケスの異端は罪を宣告せられたるを以て基督は唯一の性質を有すると云ふことは世界に用ゐられざるに至りたれば更らに改めて基督には唯一の聖意ありと唱へたれば東方の皇帝は此の異端を扶助して益々擴張に努力したりしが聖マルチン法皇マクシム大修院長熱心に此の異端を駁することを努め遂に捕へられて殉教したり其の後コンスタンテンボゴナ帝位に即きてより法皇と協議し君堡に於て公議會を開けり是第六回となす此の議會に於て異端及び異端人は公會と絶交せられ漸々煙滅に歸し公會に平和に復するを得たり。

△異端人の續出に際し公會を慰むることあらざりしか

東方に於ては信仰冷淡に傾き爲めに異端人續出し頗る教會を害せられし公會は實に哀む可き境遇に陥りたり然れ共亦之を慰むることなきに非らず即ち北方に於ては公會宣教師の努力によりて公教を信するもの大多數に至り大に喜ぶ可き時期は來りぬ此の宣教師中に於て有名なるはマイアンスの司教聖ポニファスにして此聖人は獨乙國に布教せしが就中ババリアに於て著しき奏功を見るに至れり此ババリアの地は偶像教の巢窟なるに拘らず之を化して公會に歸依せしめ偶像を破壊したり而して聖人の逝去する時に當つては此の地の人民既に悉く聖教を信するに及びたり聖人は二十五年間此の地に布教したる後ち遂に殉教し其の墓地に於て種々の奇蹟を顯はしたり時に七百五十五年なり。

△八世紀の終りに當りて公會に反する異端人は出ざりしか

出でたり即ちイコノクラスと名くる異端人にして繪畫を破ると云ふ義なり此の組は東方國皇帝レオンにして元より尊者たる皇帝が開祖たりしを以て其の進歩も亦隨て急速

なり此のレオン帝は元より無學の矇昧の人なれ共戰術に長じたるにより皇帝の位に即くことを得たり皇帝は公會の教理を解する智能を有せざるに拘らず公會を叨りに改正せんと企て而して聖主の御像を尊敬するは偶像を拜禮するに類似せるを以て基督諸聖人の像を堂宇より排除せしむるに至れり然れども信者たる良民は恰ながら父母の寫眞に分れたる感概を成して御像を愛するの情切なるに依り帝の命に服従せず爲めに争鬭を生ずるに及び帝は其の威權を振ひ之れが鎮定に努め或は苦痛を興へて死に至らしむると多數なり且つレオン帝の子及び其の相繼者たるコンスタンテンコプロニモは父帝に勝れたる虐待を信者に加へたれば東方教會は實に憫れ果敢なき境遇に陥りたり其の後皇后イレンは此の異端を抛ちて聖座に服従せざる可らざるを覺り法皇に公議會を開會せられんことを請求せしに法皇アドリエンは此の請求に應じて二世に於て開會したり是第七回公議會なり此の議會に於て御像を尊敬するは異教人の木石等を拜すると異り龜鑑となるべき聖人の御像を尊敬せるに原くものなれば尊敬は至當のものなりと決せり時に紀元七百八十七年なり。

△シャルロマンユ帝のことは如何

シャルロマンユ帝は佛國の皇帝にして公教を弘める爲めには大に力を添へたるの人なり法皇に反抗せる以太利國の北部なるロンバールを征しサクソン人と三十年の久しき戦争をなし眞の公會に歸依せしめたり帝の即位したるときは七百六十八年にして當時佛國は未開昧昧にして教育普からず學校の設置未だ完全ならざりしが意は銳意之れが進歩に意を注ぎ學校を興し學藝を進めん爲め外國より良師を聘備し又都會修院及び宮殿等を修め就中人民をして天主の道を覺知せしめんとしたるは帝の全力を注ぎたる所なり而して帝の宮殿内に置れし學校の如きは巴里府大學校の起原となりたるものなりと云ふ斯く帝は公會を扶けたるの功偉且つ大なりしを以て法皇は帝に皇帝の位階を授與したり此の即位式は第三世レオン法皇の執行せしものにして紀元八百年聖主降誕の當日なりしと云ふ。

△九世紀の中頃に於てフォシユスの頑固なるが爲め紛争を起せしことなきか

有りフォシユスは才學兼備の名高しと雖も此の才學は慾望を誘起する基となり反て公會に大害を及ぼすに至れり即ち東方國總理大臣の權威を借りて君堡の司教を罷免し自から其位を篡奪せり且つ第一世ニコラス法皇に飾奏して曰く吾臣敢て司教の座位を望みたるに非らず信者等の輿望を納れ其の撰を諾したるのみ而して聖イギナスは自から其の職を辭したるなりと然れども是れ皆な詐言たるに過ぎず初めてフォシユスの野心を抱藏するやイギナスに迫りて其の位を辭せしめんとすイギナス諾せず因りて獄に投じ且つ大甚しく侮辱を加へたり其の後ち聖イギナスは事情を詳記して法皇に伏奏し法皇は奏書に因りて當時の真相を審かにし直にフォシユスを黜け聖イギナスをして舊位に復せしめたり是より先きフォシユスは此の法皇の敕書を掠め別に敕書を偽造して己を庇護したる如く聲言し而して尙其の座位を離ることを敢てせざりしなり時に紀元八百六十二年なり其の後ちジバロ帝位に昇るに及びフォシユスは放逐せられ聖イギナスは舊位に復するに至りければ聖人は法皇に奏して公議會を開することを請へり法皇之を諾し三人の使節を派遣して會場を總理せしめたり是れ第八回公議會にして君堡に於て開會されたるもの即ち是なり而してフォシユスに議會列席を許したりと雖も彼其の

出席を忌みて之に應せざりしも強て之を出席せしめ面のあたり詰問すと雖も敢て答へず只御主遭難の時答へられたる詞に等しき言を以て答へたるのみ然れ其會議は固より有罪の事實判明なりしを以てフォシユス及其黨與を放逐し法皇は之に認可を與へたり由りて東方は平和に歸するを得たり然れども其の殘黨尙存して後日法皇と分離するに至りたり時に紀元八百六十九年なり。

△第九世紀及び十一世紀の間に歐洲北部の蠻族は公會を害せしことなきか

有り蠻族は獨乙英國佛國西班牙以太利等を侵畧して遂に公會信者を虐待するに至れり此の難に當りてや學者等は修院に遁れ入りて纔かに難を免れ美術品及史書は蠻族の亡す處となりたりしが修院に遁れたる學者等の筆寫によりて此の時代の事態を後世に傳ふることを得たり而して彼の蠻族は此の侵掠により此地の公會に感化せられ殘忍なるものも遂に溫柔なる公會の子たる榮を得たり九世紀の頃には露國瑞典匈麻等を公教に歸化せしめ其の後ちノルマン人佛國を掠侵し一時暴虐を逞せしが俄かに一變して公會に歸服するの喜びを得たり時に紀元九百十二年なり後ちまた九世紀の終りに至り蠻族

中の蠻族とも云ふ可きオングリアは獨乙國の教會を紊亂したるも國王聖ステファノの教導によりて良民に化したり。

△第十一世紀の頃異端人は公教會に反對したることなきか

有り之即ちペテンジユと云ふ人なり此の人は佛國のアンジユと云ふ地の教會神父なりしが十世紀に至る迄で御主の聖體に就き熱心に其の教説を守りしが己れの名譽を高からしめんとの野心より遂に異端の説を吐くに及べり其の説に曰く聖體には基督の肉身及靈魂等を含まずと茲に於て法皇公會博士離俗者及び信者等一致團結して之を駁論せしを以て遂にペランジユの異端に加擔するものなきに至り著書を燒き以て彼れをして自滅に歸せしめたり時に一千五十年なり。

是聖體に對する異端の煙滅にしてカルピンに至る迄再び世に出ること能はざるに至れり。

△希臘教の公會より分離したるは何故なりや

是れ即ち君堡司教の慾望に出たるなり。

蓋し君堡の司教は羅馬聖座の主權を忌み己れも亦此權を握らんと欲し之を羅馬聖座に請求したり就中其の中にて慾望の大なるものはミツセル、セルレル其の人なり此のミツセルは資性豪放にして遂に羅馬聖座と分れたり此の分離の正當にして過失なきことを辯疏する爲め疊きにフォシユスが訴へたるを再び訴ふるに及べり其は即ち土曜日到大齋を守ること四旬節にアレヤの誦をなさると髻髮を剃除せざることスピリトサントの發生及び無酵の麴を用ひざること等にして羅馬聖座の規則に耐え得べからずと主張せり然れどもスピリトサント發生を除くの外大害を發見せず唯スピリトサントに就てはニセの議會に於て信條に他事を加ふるを得ずと決したるに拘らず其の後君堡の公議會に於て子を加へたとありと雖も當時彼等は之を是認したるに依り今之を不可として訴ふるの理由なきなり又麴を作られたるは主が逾越の祝日に當り此の麴は有酵なるか無酵なるかと云ふに舊約により猶太人の例を調査すれば其の無酵なること自から明白なり是に依て考ふれば羅馬の聖座と分離するの理由なきにも拘らずミツセル、セルレロは終に聖座と關係を絶ち之と分離するに至れり時に一千〇五十三

年なり其の後ミツセルは偽勅書を造りゼルザレム、アンチヨシユ亞歴山の司教及び東方教會に對して法皇と分離すべきことを勸告したり然れども之に賛成し同意を表するもの少なかりしが十字軍が君堡を占領したりしより希臘人は西方教會信者を嫌惡すること甚だしく遂に全く離教の悲を見るに及びたり。

△聖ブラジノのことを語れ

聖ブラジノは有名なる學者にして當時レンスの教會の附屬に頗る盛大なる學校あり聖プリノ推されて其の校長となりたり此の聖人は現世の名利を厭ひ親友と共に幽邃にして明媚なる深山シャルトに塾居して修院を立てたり此れ此修院の元祖なりと名けてシヤルツルズと云ふ此の修士を立てたりし初めに付て或る歴史家の曰へるあり曰く此修士は人間にわらず恰かも天使を見るの感ありと則ち一人毎に各々小屋を構へ其の構内に一個の空地あり修士は敢て其構内を出づることなし而して一週に一回其の週間に要する食糧を分與せり而して交互談話をなさず誰手眞似を以て必要の意思を通ずるのみ此等の修士の勤務は只手仕事のみにして休息時間は祈禱する時のみ而して日曜日に必

らず集會し衣服は飾りなき素服を着し御堂に於ては唯コップの外他に金銀の飾りあるものを見ず皆な清貧に安じたり此の修士は延蔓甚だ速かにして歐洲全土に映盛を極むるに至れりと云ふ是に於てブリノは其の功勞により聖人に列せらるゝを得たり後ち聖人の死せんとするや悉く修士を集めベランジュが聖體の事に就き反對したるも修士等は之が爲めに動かさず厚く聖體を信す可きことを祈りたり即ち祈りて曰く聖體のことに就ては深く信せり聖體は聖別式に於て眞の肉身に聖化せられたるなり是れ終りなき救世の徽章なりと言ひ了りて絶息したり。

第四章

自一千〇九十九年
至一千二百七十年

△十字軍の顛末如何

佛國神父ビエロレルシットがゼルザレムへ參詣したる時土耳其人が基督の磔場墓地其の他の靈地を汚瀆し或は信者を虐待して其參拜を阻碍するを實見し大に心神を煩悶せしめたり而して慷慨して其の地を去り佛國に歸り第二世ウルベン法皇に事の狀態を見聞せり法皇大に怒り之を扶けて土耳其人を膺懲せんとし先づクレルモンクレルモンの地に於て公議會を開催することを命じたり既に於て會開かるゝやビエレル及び法皇は熱誠の意と燃ゆる處の辯を揮ひ滔々としてゼルザレム瀆聖の狀を集會人に告げ以て其の意見を徴したりしに皆な大に感憤する處あり思へらく是れ天主の聖意なり援助せざる可らずと是に於て赤色の十字架を畫きたる布片を以て征討軍の徽章となし之を軍隊に頒ちて各々其の右肩に附着せしむ名けて十字軍と云ふ。

△第一回十字軍の狀態は如何

公議會に於て出軍を決するや從軍を望むもの實に夥しと雖も此征討軍たる元來烏合の兵にして而かも兵站整はず途中に於て死するもの殊に多く訓練を受けたる兵士と云へば僅かに五萬人を剩すに過ぎず然れども熱誠忠實なる遠征軍は秋毫の屈色あることなく進んでパレスチナに入り尙進でゼルザレムに入らんとす此の時に當り土耳其人は遠征軍の漸く境國に近くとを質知し道に砲柵を列ね城壘堅固にし以て専ら防戦に努めり然れども十字軍の勇武なる進でゼルザレムを圍むと五週日遂に陥れたり時に金曜日午後三時にして吾主が十字架上に磔殺せられたると同時なりしも不思議なれ是に於て十字軍は武器を捨て血衣を脱し跣足にして救世主が艱難に因りて清く聖くせられたる此の靈地に参拜し流涕して聖恩を感謝せり後ち一週間にして十字軍は其の占領地へ支配者を置くこととなりしにロレンの大主教ゴドフロワド、ブヨン其撰に當れりゴドフロワド、ブヨンは十字軍中拔群の人傑なりしが聖墓に於て王位を受け金冠を授けられんとしたる時答て曰らく吾主は尊き身を以て曾て荆冠を冠られ余は卑しき身を以て今や金冠を戴かんとす眞に非分不敬のことなりと時に紀元一千九十九年なり

△兵宗門とは如何

十字軍より出し一つの團隊にして修士と兵とを合したる兼徳の團隊なり兵宗門の中に於て昔し有名なるは聖ジョアンの看病と稱するものにして今日に傳來してマルトの兵宗門と云ふ此の兵宗門はゼルザレムに病院を建て参詣人の病に罹るときは力らを盡して看護す此の兵宗門は十字軍がゼルザレムを占領したる當時組成せられたるものなれば十字軍隊中より其の行爲目的に感激して兵宗門團隊に加入するもの頗る多きに及びり此の團隊たる單に他人を救護するのみならず苟も公會に反對するものあらば直に之を討伐するを以て目的とす時に一千百十年なり再後の兵宗門の發達甚だ速かにして又た廣く傳播するに至れり其の後ゼルザレムの拉丁國滅亡するや兵宗門は遂に此の地を去りてロッド島及びマルト島に移住することとなり此の地や要害甚だ堅固なるを以て土耳其人が屢々之を攻圍すと雖も遂に陥落すること能はず是を以て觀れば兵宗門の勇武古今に冠絶すると雖も抑も亦天險の島嶼と云ふ可きなり。

兵宗門は實に公會の金城鐵壁とも云ふ可きものにして土耳其人が公會を煙滅せんと企て

數々襲撃を加へたるも兵宗門は常に防備を嚴にして毎戰之を撃退したり基督が「世の終り迄で汝等と共に居る」と宣言ひしも蓋偶然然るに非ざるなり因是觀之兵宗門は當時宛も敵を防ぐ機械に使用せられしものと云ふも敢て誣言にあらざるなり而して千七百九十八年頃佛國第一世ナポレオンの埃及を攻めんとするや其の途次マルト島を占領し二年を経て英國を占領したるが故に兵宗門は此の島に在ることを得ずして羅馬に集り今尙此の地に在りて存するなり。

△十二世紀頃眞の修院は出来たりしか

修院は二あり一はマグトプールの司教聖ノルベールにしてプレモツレ大修院を建設し一つはシトの修院是なり此のシトは頗る僻陬にして猛獸巨蟒此に棲息し實に恐るべき忌むべき地なるに拘らず此の地に於て聖ベチジクトの規則を勵行したる結果初めは少數の修士集ひ來るに過ぎざりしが終に盛大なる修院を建設するに至りたり。

△十二世紀に於て著名なる人傑は誰ぞや

聖ベルナルドなり此聖人は才高く家富みて現世に於て高位を占め衆庶に尊敬せらるべ

き家柄なるに拘らず少年の時より能く公會の規則を守り紛々たる塵世の榮華を翫ふを欲せず身を靖献して以て天主に奉事せんと決心し親戚朋友を拉してシトの修院に入りたり其の後ベルナルドの品行と其熱心とに感激して修士たらんと欲す續々來會しシトの修院は遂に狹隘を告ぐるに及びたればクレルオオに修院を建設しベルナイド其の院長に推撰せらるゝに至れりベルナルドは稟質熱心の人なれば従つて修院の規則も嚴格にして院内の靜寂なること來客も其の嚴正なるに感じ決して聖を瀆すことなく端然として威嚴を保つに至れり此修院中の修士は現世に於ては高位高官若くは富有の身分多しと雖も天主の爲に貧に安じ名利を抛ちて以て贖罪をなすもの少なからずベルナルドは奇跡紛争の裁定異端人を駁すること等の名譽は之れを欲せざりしが桃李云はざれども自から蹊をなし何時となく盛大にして名譽高き司教及教父に至るまで其の難題ある毎にベルナルドに就て質するに至りたり此の人の如きは當時公會の光輝として隠れなきに至れりと云ふ。

△第二回十字軍の顛末は如何

ゼルザレムは土耳其人の侵襲により危急に迫りしを以てゼルザレムの皇帝は西方の皇帝に向ひ之れが援助を仰ぎしが法皇は聖ペルナルドを以て十字軍發起の遊説とし之を佛國獨乙國に差遣せられしに聖ペルナルドの雄辯と奇跡とに依り頗る大多數の應募者を出したり就中佛王ルイ、獨帝コレノラドは多額の軍費を出して之に應じたり此の軍費は土耳其人を征討するに餘ありと雖も十字軍の風紀紊れたると希臘猶太人の囹に陥りたるに依り遂に敗軍に歸し目的を果さざりしと云ふ時に一千百四十七年なり。

△第二回十字軍の時聖ペルナルドを駁する人なかりしや

第二回十字軍敗軍の悲劇を演じたれば其の罪を十字軍の誘導者たる聖ペルナルドに歸し之を駁するに至りければペルナルドは之れが辯解をなして十字軍の敗北は其の風俗不良なりしに基因することを辯じたり而して十字軍誘導及び出軍は天主の聖意に敵したるものにして其の証たる誘導の當時多くの奇跡を行ひたることに因て明かなり而して辯解に就ても亦奇跡の恵みを與へたり即ち盲兒を醫して明を得せしめたり其の時祈つて曰く天主よ我が十字軍を誘導したるは天主の聖慮によりてしたることを証明せよ

と祈畢るや盲者即ち癒へたりしと云ふ。

△第三四五回十字軍の事を語れ

サラジン人ゼルザレムを占領するに及びゼルザレム人は再び非境に沈淪したるにより西方に於ては之を援くる爲十字軍を召集せり即ち英佛人は之れが主唱者となれり而して其の十字軍を起すに先立ち恰かも佛英交戦中なりしが十字軍を起さんとするに及んで互に戦を中止して主の爲めに力を致せり而して兩軍出陣するや疑にサラジン人がアークルを圍むこと二年に及び其の陥落旦夕に迫るを以て先此の地を目的として進撃しサラジン人を撃破したり此の時サラジン人がアークル市を還附するに際し眞の十字軍も共に還附することを確かに約したり時に千百九十一年なり其の後ち十字軍はゼルザレムを取ること能はずアークルの信者は唯だ自から堡塞となり敵の侵入を防禦したるに過ぎざりしのみ是を第三回十字軍の結了となす次に又第四回十字軍を起しゼルザレム恢復を企てたりと雖も効を奏する能はず千時一千百九十七年なり。

△第五回十字軍は其の結果公會を益したるか

五回の十字軍は現世に於ては幸福の時となれり君堡の拉丁國を組成したる即ち是なり然れども公會に對しては大害を醸すに及べり即ち佛國軍は君堡を援け及びゼルザレムの聖地を恢復せん爲め軍をベニーズに集注し天晴れ氣朗かなる日を待ち將に出發せんとしたり然るに此の時君堡の太子アレキシス來り援兵を乞ふて曰く今や吾が父王の位を纂集したるものあり願くは速かに來りて吾を援け王位に復せしめよ果して吾が請を容れ給へば誓て東方を法皇に服従せしめ且つゼルザレム進撃に力を致す可しと是に於て直ちに其の請を容れ直ちに君堡に向つて出發したり而して交戦僅かに六日にして君堡を陥れアレキシスに帝位を授け權を握らしめたり其の後ちアレキシスは反逆の爲め弑せられたれば十字軍は此の變を聞きて君堡を占領せざる可らずと遂に之を畧て拉丁國を組織し國王を撰んで位に即かしめたり。

斯く新拉丁國組織の爲めに心存はれたりし爲めゼルザレム恢復の事を等閑に付したり之れ公會に大害を醸したるのみならず十字軍の兵士等は貴重なる希臘の聖人の遺骨等を畧奪したるにより人民の厭ふ處となり全く東西分離の媒介となれり時に千二〇四年なり。

△ドミニコ會の起原と其の進歩の狀は如何

此の會の開祖は修士聖ドミニコにして西班牙國に生れたり此の人少年の頃より靈魂を救ふことに心を傾け彼のアルビジョアが公會に反對し且つ社會に對して害毒を流すものなれば聖人は之を撲殺せんことに思慮を勞せり而して他の神父等ドミニコに附屬し其の數多きに達したるを以て遂に一つの修院を組成したり此の修士の勤務は即ち異端人外教人の論なく公平に福音を宣傳するにありドミニコはアルビジョアを公會に歸正せしめんと慮る内聖母マリアの默示にロザリオの祈りを創て之を祈れと告げられたれば聖人は之に従ひたり之れ此の聖人を元祖とす聖人晩年に及んで修士大に増加するに至り爲めに世界の國に行亘り福音を傳ふるに至りたり。

△他に聖人は開かれざりしや

一個の修院は別に創始せられたり此の開起者はアシジオの聖フランシスコと云ふなり聖人未だ年若き頃病氣危篤に及たるを以て現世の事を打捨て、唯天主の事のみを思

ふ可しと決心したり此の決心は大に父の意に悖りて父は聖人に財産を譲ることを廢し
 廢嫡したりと雖も聖人は之を悲まず此の世の父は吾を捨つるも天の父は反て我を扶け
 んと思惟せり而して能く金錢を貯ふる勿れ旅囊二衣を携ふる勿れと云ふ聖言に服従し
 たり而して又諸方の人民に向ひて罪の贖ひの爲め肉身を懲し罪の赦しを願ふ可しと傳
 へたり此の聖人自から守る規則は頗る嚴重なりと雖も修士之に風靡し皆な他人を扶助
 するに勵みたり之を名けて「小兄弟」と稱す此の名稱は謙遜より出たるものにして衆中
 最小さしと云ふ意を含むものなりフランシスマは埃及國に赴きサラジン人により殉教
 せんと決したるにサラジン人は反て此の聖人の碩徳を欽慕して苦みを與へざりしと云
 ふ其の後聖人は佛國に歸り益々公會を盛ならしめたり一千二百二十六年遂に死せり。

△第六七回十字軍のことを語れ

第六回十字軍は獨逸皇帝の卒る處なるがゼルザレムを占有したるは僅かに兩三日に
 過ぎずして獨軍の退去するやサラジン人はゼルザレムを略取りたるにより公會を益し
 たると少しと云ふ第七回十字軍は佛國王第四世聖ルイの統軍にしてサラジン人の根據

地埃及のダミエットを攻取すれば他は自から降伏すべしと思惟し埃及に向ふて進軍し
 たり而してダミエットを破り進で都府に入らんとする途次に於てペスト病流行し或は
 饑饉等の災害に遭遇したる爲め軍氣大に阻喪し戦終に利あらずルイ王は兵卒と共に擒
 どなれり然れども王は少しも憂慮すると無く唯天主の難有を思ひて他事に及ばず嗚呼
 思ひ内に在れば外に顯はるゝは自然の理にして怨色なく憂色なく端然として天主に事
 ふる佛王を見れば誰か滴涙なからん彼の暴惡なるサラジン人も遂に感動して自國の王
 たらんとを願ふものあるに及びたり王は三ヶ月間獄舎に繋がれたるが終りに償金を出
 して身の自由を得兵と共にダミエットに歸りたり而して此のダミエットに於ても償金
 を出して信者の擒となりたるものを救ひ且つ此地の砲臺を修築したり是れ第七回の終
 りなり時に一千二百五十年なり。

△第八回十字軍及び最終の十字軍の状態如何

サラジン人は信者に向つて回々教を信せざる者は迫害すべしと云ひて大に信者を苦め
 たるが佛王第九世ルドビコは聞て之を怒り之を救はんとして八回の十字軍を企てたり

而してツニースに進撃し埃及を攻略せば容易に目的を達すべしと前會を勵行したりツニースに進たる時恰かも酷烈なる炎暑に際し飲料水悪水にしてベスト病を發生するに至れりルドビコは終に病に犯され病勢漸く危篤に迫りたれば王は罪の償をなさんと灰を敷て其の上に横臥し手を胸上に組みて十字斜形となし天を仰で祈りつゝ死に就きたり王子は父王の屍を佛國に送りて之を葬ひる後ち王の墓に於て奇跡あること屢々なれば薨去後二十年にして列聖式を行ひ聖人に列する榮を得たり王薨すると共に十字軍は又起らざりしなり。

△十字軍の利害は如何

或る人之を非難すれども十字軍は決して正理に反すること無し即ち其の目的はサラジンの爲め信者を援くるに出たるものにして至當の出師と云ふ可し其の目的を達する能はずして止みたるは遺憾なりと雖も十字軍は東方に於て目的を達する能はざるもサラジンをして西方國侵略を擅にせざらしめざりし功に至ては又著大なりと云ふ可し若し夫れ十字軍徴せば西方國と亦東方國も共にサラジン人の掌中に歸するや知る可し

十字軍の利は管に是のみに止らず西方に於ては二百年以來大名は各藩に割據して互に戦ひ戦争止むときなく實に戰國時代とも云ふ可かりしが一度十字軍の起るや互に相敵視したる大名等はゼルザレム救援の爲めに皆宿怨を捨て、相統一し遠征に従事せり故に十字軍は西方國の戦争を掃除して長空千里の平和に復したりと云ふも誣言にあらざるなり又大名等は從來土地を私有し労働者に自由を興へざりしが十字軍の起るや其の軍資を充たす爲め領土を人民及労働者に賣りたるにより人民等は土地所有の權を得労働者は束縛を免れ又人民は市長撰擧の權に市邑の人民を統せしむる等總て自治の制を允許したれば時勢茲に一變せり而して商業は愈々隆盛に赴き外國との通商頻に及び航海の術も亦大に起れり米國發見は蓋し之が基となりしなり其の他學藝は進歩し農業起り世界文明の礎を開きたりと云ふも決して過言にあらざるなり而して十字軍は有名なる哲人若くは學者に論なく一意専心之に従事し敢て一人も之を不可としたるものなく且つ天主が之を賛せられたる徴候として十字軍發企の當時及び遠征中と雖も多くの奇蹟を行はれたれば之を不可とし害物なりとして難ずるの理由なきは昭々乎として火を

睹るより明らかかなり然り而して遠征中に於て掠奪の所爲有りしを難するものあれども既に戦争と云ふ以上は又如何どもし難し然るに彼のプロテスタンは常に公會を譏誣せんとし口舌を以て頻りに云爲すと雖も其の著書に於て論議すること能はず何となれば正確なる引証論據なければなり。

△十三世紀に於て公會に有名なる博士はなきか

二人あり聖トマスと聖ボナバンチュールなり此の二聖皆な以太利國に生れたり聖トマスは天主より特別に其の性を稟け智力秀抜なれども叨りに言語を發せず唯だ默然たるのみ故に朋友等は之を緯名して牛と云へり蓋し牛は力量強大なれども其の動くや靜なりと云ふ意に出づるなり教師此の緯名を開き生徒等に語て曰く此の牛一度啼けば其の聲世界萬國に音くと云へりトマスは天主より特に寵愛せられたる底の人物なればルータルは大に之を忌みて曰けらく公會にトマスを除くときは人物なし故にトマスを除けば公會を倒すや容易なりと云へり。

法皇は之とナーブルの大司教に選任せんとしたるにトマスは資性謙遜なるにより固辭

して諾せず修院に於て業を勉め紀元一千二百七十四年に死せり聖ボナバンチュールの父は熱心に天主に奉事せし人なるが聖人も亦幼より天主に奉事し瞬時も天主を忘れざりしが一日病臥してフランシスコの祈りをなし此の祈りによりて病癒ゆるを得たり是に於て感謝の意を表する爲めにフランシスコ會へ加入したり第十グレゴリー法皇はボナバンチュールの高才を賞して樞機員に任ず後ち二百七十四年里昂の公議會に於て死せり聖人は救靈の事に關し書を著はし布教に盡碎したり其の靈魂を導くことに至ては多く得易すからざるなり。

△希臘の異端人は法皇と和し、ことありや

ミッセル、パレオログは東方國の皇帝にして分離を忌み法皇に向て一致を謀れり即ち里昂に於て第十四回公議會を開きたりしが東方國より皇帝及司教の全權代理公使を派遣して離教を捨て、法皇に服従するの約を調へたり時に一千二百七十四年なり其の後に平和は打ち續き再び分離するの患なかりしがパレオログ帝の相續者は法皇を忌みて又分離の不幸を見るに至れりと云ふ時に一千二百三十八年なり。

第五章

自一千二百七十年
至一千五百九十三年

七十四

△西方一大離教の始末を語れ

佛國人たる法皇第五世クレマンが座をアピンヨンに移したるは羅馬に取りては大なる悲と云ふ可し是曩に争の起りたる結果爰に至りしものなり其の後ち一千三百七十七年第十一世グレゴリヨは再び羅馬に遷座したり此の教父の崩後法皇を選ぶに當り樞機員は規則に準據し選舉場に入りて法皇を選舉せんとしたるに羅馬の人民思へらく佛國人を法皇に選舉するときは又都を佛國に移さんことを患ひ選舉場の門前に集ひ威赫的運動をなし羅馬人を選舉せよと絶叫したり然れども唯火呼するのみにて敢て腕力を訴へざるにより自由を害する決して有ることなし而して樞機員等は第六世ウルベン法皇を選したり此の教父は頗る嚴格の人にして束縛せらるゝを厭ひて之が範圍を脱せんと欲し第七世クレマンの名を以て僞法皇を選舉して曰く前法皇を選舉せしときは人民の威赫に恐怖したる選舉にして選舉の自由を束縛せられたるなりと附會せり時に一千四百

七十九年なり而して此のクレマン僞法皇に座を佛國のアピンヨンに遷せり然れども樞機員が選舉に自由を得ざりしとは全く虚也何となれば第六世ウルベン法皇を選舉してより三ヶ月間は之に服従せしにあらざるや若し果して自由なき選舉なりしなれば此の三ヶ月間に於て直に改撰せざる可からざる筈なり然るに之を改選せざる以上は第六世ウルベンは眞の法皇たるや明らかなり其後ち二法皇は世を去るに依り此の惡例は廢棄せらるべきに尙ほアピンヨンと羅馬に於て眞僞二法皇を選舉したり之實に積年の迫害に比して大なる悲と云ふ可き也茲に附言す可きは僞法皇を選びたる當時未だ郵便電信の設けなきにより一般に之が眞僞を知るものなきにより眞僞を混同せしもの實に多かりしなり。

△西方離教の終りは如何

吾主は世の終り迄教會と偕に居ると約せられしを以て前年の迫害以後一層悲哀の時を逢遇するも主は之を守り給ひて遂に西方大離教の煙滅するに及びたり曩きに離教の起るや人民等は甚だ之を患ひて必らずや之を矯正す可しとの念願なりしに信者たる諸國

帝王は樞機員に勤告して公議會を開き此の弊を治せんことを獎勵したりければ樞機員等はコンスタンスに於て公議會を開會したり是方に十六公議會なり此の議會に於て眞僞共に其位を辭せしめ更らに眞正なる法皇を選びたり之れ第五世マルチン法皇なり之より皆な法皇に服従して公會は平和に歸するに及びたり。

△ジョアンウイスの異端は如何

此のウイスは離教の争亂を機とし司教及び法皇の權に付き異端を説き出して其の權を無視しコンスタンスの公議會に於て異端を弘めんと謀りたりコンスタンスの議會はウイスに召喚狀を發して異端を查せんとすウイスは召喚狀を見て出席を諾し且つ書を添へて曰く我れ果して異端を稱ふるものとせば直に其の証左を示せ然らば我れは公議會の決議に従ひ如何なる罪科をも受くることを拒まずと曰へりシッスモン帝は一つの特權をウイスに與へたり之即ち議會が若し嫉妬に出でウイスに罪を宣告する場合は受刑するに及びざるの特權なり故に眞にウイスの罪狀を認むる場合に於ては此の特權を適用することを得ざるものなり然らばウイスは眞に罪科有り認めらるゝときは帝の特

權を濫用して罪科を免るゝことを得ざるものと云ふ可きなり後ちウイスはコンスタンスに來り未だ議會の判決なきに拘らず遠慮なく異端を弘布したり故に議會は神父の位を剝奪して裁判官に引渡したれば獨國の法律に隨ひ其の異端の書と共に燒殺せられたり或る人は異端人を燒殺したることに就き公會を非難すと雖も是れ教政混同の言のみ唯だ夫れ公議會は國政に關與す可きものに非らず故に唯司祭の位を剝奪したるに止まるのみ而して之を燒殺したるは國法の命ずる處にして公議會とは自から別問題に屬せり且此の國法を以て苛酷なり殘忍なりと速斷すべからず吾人にて之を看れば寧ろ其正當なるを信するなり何となれば異端の説たる人類の性心界に大苦痛を與へ大感亂を醸成する最も大害物なれば説くものは所謂殺人犯と同視す可きものなれば之を死刑に處するも敢て不可なかるべきを以てなり。

△希臘教は再度公會と一致したるや

一致したり希臘人は里昂に開會せられたる公議會の結果暫時公會と一致したりしが幾何ならずして又た分離の不幸を見るに至れり斯く合離常なく一致は只だ口約に過ぎず

未だ之れを勵行するに及ばずして又分裂の不幸を見るの景光なり帝ジョアンパネオロ
 グは深く之を憂ひ頻に其一致を希望し第四世ヨゼフと相議し公議會を開きたり是第十
 七回公議會にしてフロランスに於て開會したるもの是なり此の議會に於て東方の司教
 は離教を斷念して法皇に服従し再び分離す可らざることを誓ひ信條を規定して法皇の
 主權に服従し聖靈は聖父聖子より出ること等を確定したり時に一千四百三十九年なり
 是に於て司教等は各教區に歸任したり而して東方の人民等は羅馬法王を忌むこと最も
 甚しく公議會に出席したる司教の東方に歸るや人民は疑懼して之に服従せず是に於て
 か又止むなく離教の慘を見るに至れり。

△天主は如何にして東方教會の罪を罰したるか

昔より聖トマスの相續者たる法皇を忌避し之れに服従せざるにより天主は土耳其の第
 二回々を機械として之を罰せられたり即ち第二世回々は三十萬人の兵を卒いて君堡を
 圍み三日にして之を陥れたり回々兵は皆な亂暴にして殺害を擅にし屍山の如く流血河
 をなせり時に一千七百五十三年なり斯の如くにして遂に君堡拉丁帝國は亡びたり即ち

此の拉丁國は建國以來一千百年にして滅亡したり之れ希臘人が頑固にして法皇に服従
 せざりし冥罰にして異端離教の酬ひたらずんばあらざるなり而して此の希臘人は終に
 土耳其人の奴隸たるに及べり。

△プロテスタンの異端の原因と其の傳播を語れ

アリユス派の起りし以來此のプロテスタン程公會を害したるものはあらず此の開祖は
 獨逸國の一修士ルテールにして此のルテールは煉獄、法皇の主權、離俗者の誓ひ聖書
 自由の徳等に就て著書或は口授を以て世に傳へたり其の他赦宥告解等の事あり斯く誤
 り唱へつゝ我れは宗教大改革者なり我れは宗教改革の爲めに天主の降されたる使者な
 りと云へり時に一千五百十七年なり而してルテールは己れの勢力を強大ならしむる爲
 め公會に屬する財産領地を沒收することを太守に勧めたれば太守等は歡喜して之を勵
 行せり只に夫れのみならずエス公に一夫多妻の非理を許し己れも姦犯せざることを天
 主に誓ひながら天主を詐き又自から詐きて妻帯したり其の妻は童貞女なりしと云へり
 之によりて見るときは改革者にはあらずして全く惡風を社會に流出する毒泉にして其

の異端たる疑ひなし此の異端は人世の情慾を満たしむる社會の惡弊を矯正せず言を換へて言へば淺薄なる人情の逆流に立たざるものなれば速かに長足の進歩をなし瑞西獨逸西典威諾丁摩の諸國に波及せり而して彼れは始め自己の勢力なきときは僞て教皇に服従し後漸く己れに附和雷同するものあるに及で公然教皇に反逆し種々猥褻の言を吐露して教皇を侮辱したり而して食事の話と題する卑猥實に名狀す可らざる書を著作したり是畢竟プロテスタン徒がルテール生涯の名聲を汚穢したる者と云ふ可きなり。

△第二のルテール派の主唱者は誰か

之れ即ちカルベン派なり此の人はルテールに亞ぐべき人にして一千五百三十三年に生る此のルテールの異端を受け又加ふるに最も甚しき異端を主唱したり曰く天主が人間を創生したるは之を罰せんが爲めなるにより罰せらるゝ人間は罪あるにあらず之を罰するは天主の嗜好なりと斯く甚だしき暴言を吐きて天主を辱む何ぞ瀆聖の甚しきものにあらずや又聖體には肉身靈魂をも含まずと唱へ且品級及禮典を捨てたりカルベンは諸所を徘徊してジエチブに至り此地を以て己の都府の如く根據地の如く振舞ひたり

而して自から政權を握り絶對的專制なる政令を敷けり曰く今後より人民が殺生與奪は我が自由に任せり故に公會其他の有權者に服従するを得ずと主唱して己れの定めたる法政は是非に論なく之に服従す可しと命せり其の矛盾の甚だしき以て完全の宗教に非らざるを證するに足れり此の後ちミッセルセルベルと云ふもの此二個の著書をなしたるにカルベンは自説に異りしとて大に怒りたりミッセルセルベルは此の事を知らずカルベンの都府に走りたりカルベン大に喜び捕へて彼に火刑を言渡したりき時に千五百五十五年十月二十六日なり。

△英國離教の始末を語れ

英國のアンリー八世はアンドブレンの姿色に惑溺し皇后を捨て、之を容れんとしたるに法皇は之を許さず是に於て法皇を離てアントブレンを容れ而して自から英國教會の教權を握れり後アンリーは死して其の女王マリーは相續ぎたり此のマリーは熱心なる公會の信者なれば自ら公會に服従すべき念を懷けり然れども未だ志を果すに至らずしてエリザベット皇位に即けりエリザベットはアンリーアンドブレンの子なれば又皇の

志を續で異端を隆盛ならしめたり。

△ルテールとカルビン派の叛逆を企成に及びたることなきか
有り即ち彼等は管に公會のみならず帝王にも反對せざる可らずと説けり故にルテールの弟子をプロテスタン即ち反抗者と云へり此の黨は強制を以て己れの教派に服従せしめんとして諸所を掠略せり其の旗に書して曰くバビスト法皇に従はんより寧ろ土耳其に從ふに若かずと。

此の黨は甚だ治め難く且つ喧噪なるが故にシャルロケン帝は之を征するに頗る困難を極め遂に鮮血を流すに至れり抑も自由とは自己の自由のみならずして他人の自由權をも認めざる可らず然るにプロテスタン徒の如きは唯自己の自由のみ稱へ反て他人の自由は束縛し威嚇して己れの意は從はしめんと企たり又カルビン派も宗教戦争と名けて聖堂を破壊し童貞を殺害する等の虐待をなせり聖堂破壊は實に二萬の多きに達せり甚しきは聖骨を焼く等の暴狀を極めたりと云ふ。

△公會は此の異端を矯正するの策を取らざりしか

公議會を以て矯正せんとせり此れトラントに於て開會したるものにして教父はプロテスタン教派にも其の出席を催したりと雖も之を諾せず而して尙議會に於て決議したる事項に對して遵奉すべき義務なきものとせり故に公會を放逐し異端の罪を宣告せられ全く公會と分離して其の關係を絶つに及びたりと云ふに一千五百六十五年なり爾後プロテスタンは舵なき舟の如く風のまにまに進路を採り信者の増すに従つて亦た數派に分派して終に基督は眞の神にあらずと迄唱ふるものあるに及べり而して其の社會の風俗を紊亂することに至てはモルモン徒より甚だしきものあるに至れり。

△公會はプロテスタンの異端によりて一方に於ては進歩を阻止せられたりと雖も而も他の一方に於ては萬國に普及し大に勃興するに至りしか

即ちフランシスコ、ザベリヨの力らに依りて多數の信者を誘致したるが如きは其の一例に屬す此のザベリヨは西班牙國に生れ巴里の大學校の教師たりしが現世の榮華は齒牙に懸る價なしと思惟し彼の聖イギナシヨガゼズ會を設立したる時卒先して其の弟子となりたり後ち印度へ渡りて同行の司祭等共に布教に盡力して多くの信者を生せし

め寺院を廢して聖堂を建立するに及びたり聖フランシスコ、ザベリヨは遠く日本國に渡りて布教するの希望を抱き遂に日本に赴き布教に従事せり此の地に於ても聖人の高德奇蹟に感じて歸依するもの夥し而して此の時日本信者は皆な昔の信者の如く其の信仰甚だ鞏固にして能く規律を守りたりと雖も將軍徳川氏政權を執るに及んで大に迫害を受け殉教したるもの甚だ多し是に因て一旦煙滅に歸したるが如しと雖第九世紀の中葉に當り再び發芽を見るに至れり。

△十六世紀末葉に於て公會の有様は如何

此の世紀甚だ悲む可き時代なりと云ふ可し即ちカルビン派逆の爲め其の戰三十年間の久しきに瀕り公會も一時危急に瀕したり其の後佛國王第三世アンリーは崩じ皇太子なきを以てカルビン派の主領其の位を襲ふに至れり而して彼は大に公會を脱せんことを努めたりと雖も天主は他の方法を以て其目的を達せしめざりしなり即ち第四世アンリーはプロテスタンの教師等をして公會に於ても神の救ひを得るやと論せしめしに公會教師はアンリー王の野心を看破したるに依り其の討論の際プロテスタン徒をして公

會に於ても素より救を得べしと答辯せざる可からざるの論法を以て挑みたり果して其の策は成功し彼れプロテスタン徒は公會に於て救ひを得べしと答へたりアンリー問て曰く然らば何故公會と分離したるか我れは精確なるものを採用すべし而して汝既に公會の救を得ることを承認せり故に今後我れは公會に屬す可しと云へり是より第四アンリーはカルビン派を棄て、公會に歸順し法皇の赦しを得誠意公會の扶助に盡碎せり。

第六章

自一千五百九十三年
至一千七百八十九年

八十六

△トラントの公議會に於て公會は如何なる實を結びしか

此の議會の決議により諸方へ教師を派遣して無學蒙昧なる蠻民に光りを與へ大に布教を隆盛ならしめたり就中有名なるはミランの司教聖シャルロポロメーにしてポロメーは我教區に於て始めてトラントの決議事項を執行せしめたり又たゼチアの司教聖フランシスコサレジョは頗る熱心なる司教にしてカルビン派の信者を公會に歸順せしめたるも頗る多し又天主教を弘むる爲め多くの修士輩出し樞機員ベルルはオラトワールと云ふ修院を建立したり其の他ベンセンシオポローが聖ラサルの教師派遣及び愛の婦女と名る教師派遣會社を起して布教に努力したり之れ乃ち三百年後の今日に於て日本に派遣せる教師は皆な此の會より出しものなり又聖オリエと云ふ神父は神學校の教師養成學校を創立して多くの教師を養成したり時に一千六百四十五年なり又福者ドラサルと云ふ人は小學の兄弟と名くる小學校程度の學校を起して兒童を涵養したり其の他外

國へ教師を派遣するの組成立して他外國に赴き布教に従事せるものあり又女子の修院を設立して有名なるはカルメルと云ふ人にして大に風俗を改良して異端を減少せしめたり。

△派遣教師は歐洲を改善したるのみなるか

否な外國に於ても亦大に改善したり東方國に於ては希臘埃及亞米利加の野蠻國及亞細亞に至る迄で大に公會を弘めたり就中南亞米利加に於ては衣食住に不自由なるも教師が現世の樂事を忘れ苦心慘憺たる經營を以て蠻族の感化に努力し布教大に進歩して公教を知るもの多きに及びたり以上の勢力によりプロテスタン教徒をして自から感ずる處わらしめ其の數益々尠少なるに及びしめたり。

△ジョアセニユース派とは如何

此派は毒を外部に露さず野心を隠蔽する甚だ巧みなるを以て其の害たるや殊に甚し此の創始者はイーブルの司教ジョアンセニースと云へる人なり故に此の名を命じたり此の異端は彼等の著書に係るオギスニースと云ふ書に含有せり然るに聖オギスチの著書

に在るものを取りたるなりと云へり此の書は實に異端の太甚しきものにして人民をして徳望を失はしむる底のものなり曰く人善事を行ふは聖寵に依らざる可からず基督は總て人の罪を贖ふ爲めに命を捨てたるにあらず又天主の命せしことにして人の守る能はざるものあり又之を守る爲めには全く聖寵を與へられずと。

故に天主と人間との關係は恰も技師と機械とに於けるが如し技師なければ機械は働らくを得ざるものにして人天主の聖寵を保つ間は善事を行ふことを得るも聖寵なきときは惡を行ふを得べしと云ふに異ならず。

△ジョアンセニース派は公會より罪を宣告せられたるに拘らず如何にして傳播したるか

ジョアンセニース派の罪を宣告せらるゝに至る迄は必らず教父に従ふ可しと宣言せり然るに一千六百五十三年教父は之に罪を宣告して曰くオキスニース書中には此の異端を含有せず故に天主の代理者たる法皇が誤謬なき裁決をなすに當り異端有りと決定せし以上は必らず之を信じ之に従はざる可らざるものなり一千七百十三年教父は公明正

大なる主權を以てユニズチースと稱する刺書を以て此の異端に罪を宣告せり。

△第十八世紀に於て無神論の唱道せし原因は何か

之れ即ち道德の腐敗と傲慢とが原因にして總て情慾に相反する規則は悉く之を捨てたり此等の主唱者はカルベンアンリー第八世、プロテスタンの開祖ルテール等の人々なり而して此の論旨とする處は唯物的理論に従ひ精神界の如き無形にして人智の及ばざるものに至つては之を信ずるとなきを以て遂に基督教の主義を信認せる者あるに至れり故に彼等は所謂暗黒世界に墮落せしものにて終には明瞭にして敢て疑ふ可らざるものをも疑念を措くに至れり即ち天主の存在天主の攝理靈魂の無形にして永久不滅なること等に至る迄で之を信せざるに及びたれば之を名けて十八世紀の無神論哲學者と稱したり斯の如く彼等は暗黒界に彷徨し天主なし眞神なしと揚言するに至り其の行爲に至つても自然に放縱不羈に陥り天主の冥罰を恐れざるに依り社會風俗に害毒を流せし事尠なからざるなり。

△無神論者をジョアンセニース派が扶けたる状態

是れ己れの異端を辯解するに因るものにして即ち教父司教の権利を認むることを肯せざる人民は教父司教等より罪を宣告せられたるときは政府の裁判官に訴訟して反て教父及び司教等は罪を宣告せられんことを起訴せり唯に夫のみならずパリーズと云ふマジョアンセニース派の助祭は其の墓に於て奇跡を行ふと云へり而して彼の所謂奇蹟なるものは狂者の如きもの其の墓に至りて此の言をなせしに過ぎずして是が爲め真正の奇蹟を行ふも信用せざるに及びたり公會の司教等は此の異端を論駁したるため捕へられて苦めらるゝもの少なからず就中パリーの大司教デボーモンは財産を掠められ放逐に遭ひ家屋をも焼かるゝに至れり。

△司教の外無神論者に反駁を與へたるものは誰か

之れゼズス會なり此の會は伶俐熱心にして公會の教へを弘むるに致々たりしを以て無神論者なる哲學者等はジョアンセニース派のものを合縦してゼズス會を亡さんと努め佛國、西班牙、葡萄牙の王其の大臣等に向てゼズス會放逐のとを勸告したりし法皇及司教等は之を拒絶したれども聽さず遂にゼズス會を國外に追放せられ熱心なるゼズス會

は一時其の姿を隠すに及びたり。

△哲學無神論者の謀主は誰なるか

二人ありルーソーとウラルテールなりルーソーは文筆巧妙にして譽ありと雖も矛盾の僻說齟齬の暴論を吐くと言語に絶せり其の著書中の一に曰く世界は廣しと雖も吾より優りたる人は非ざるべしと天主に抗言したるに拘らず其の後ち自殺して此の世を去れり次にウラルテールも同じく公會を倒さんと常に睥睨せり曰く今より二十年間に於て公會は亡びて其の形跡を止めざるに至らんと時に一千七百五十七年なり而して其の後ち二十年に至り俄然ウラルテールは疾病に罹り而も公會煙滅を期したる當日に於て絶息したり其の將に死せんとするや絶叫して曰く余は人及神に捨てられたりと去れど眞正なる悔悟を爲さずして死したり憐む可きの至りなりと云ふべし。

△無神論者なる哲學者の教説は何か

別に教説と云ふべき價值あるものなし然れども彼が口にする處を摘記すれば眞を拒み徳を譏し道理に従はず惡事を勸誘し謬説を教ふる等は彼等に於て獨得の技能にして此

等を以て彼の教説と名くるも可なり併し眞面目に彼等を評せば教説を立つるに非らずして教説を崩すと云ふも詭言にあらず而して又彼等の説に曰く天國の幸福は無きことは勿論なれど現世に於ても亦幸福安樂を享くること能はずと故に此の無神論者なる哲學者中には厭世自殺せしもの頗る多くありしと云ふ熱心なる公會信者は之れに反し現世の苦難を厭ひて自殺することを欲せず何となれば能く現世の苦難に耐ゆるは天國の幸福を享くる種子なれば也。

△無神論は如何にして歩を進めたるか

一度無神論世に出するや高位高顯先づ之に心酔したるに依り上の好む處下之より甚しきものあり中以下の人民之に感染し廣く其餘毒を傳播するに至り其の進歩も亦甚だ速かなるに至れり加ふるに唯物論の小冊子を印刷して之を群集中若くは學校等に持ち行き無代價を以て之を配付する等の猾手段により一時多數の雷同者を顯すに至れり。

△此無神論の結果は如何

此の結果たるや即ち公會に属するものを公然迫害し昔の暴行を繰反すに至れり其の狀

態を畧述すれば修院を掠奪し及び貧民救助の爲めに建設したる病院慈善會等を略奪したり且聖堂を奪ひて民屋に使用し十字架及聖主の遺物等及聖器を焼き若くは改鑄して鐘とするが如き瀆聖も亦甚だしと云ふ可し終りに道理の女神なりと云ひ裸體婦人を拜禮するが如き迄迷信をなすに至れり時に一千七百九十三年なり彼等は唯器物のみならず人身に於ても大害を加へ佛國革命の時の如きは裁判官は無罪の人民を殺戮したることを實に幾百千なることを知らざるなり。

△此の難に於て殺されざりし司教神父は如何に成り行きしか

之等の神父等は其姿を變じて諸方に彷徨し而して信者の救靈を計り秘蹟を授け聖祭は或は山中或は夜間に若くは他人の認識し得ざりし離室に於て執行する等恰かも昔年の遭難當時と同じき慘狀に陥りたり若し彼等の爲めに逮捕せらるれば直に刺殺され甚しき苦痛を與へられたり。

第七章

自千七百八十九年
至千八百七十八年

九十四

△佛國革命の起りし頃の法皇は誰なりしか

第六世ピオ法皇是なり此法皇は一千七百七十五年第十世クレマン法皇に相續して即位したり此の法皇時代は最も平穩にして政府は諸般の法律を改革したるに人民は之に向つて大に歡迎讚美の意を表せり而して無神論者たる哲學者等はゼズス會の解除を以て勝利を博したるものと思惟し痛く公會を駁撃したり就中猶乙國皇帝二世ジョゼフは、法皇が司教を任免するの權を禁止し又公會の屬地を沒收したれば法皇は甚だ之を思ひ躬親から獨乙國の主府ビエンに至りて皇帝と平和を講せんとしたり干時人民等は法皇の國に入るを見て掩護を受けんとて大に歡迎せしに皇帝及大臣等は反て大に法皇を侮り講和の盟約を成すを拒みたり就中コニース大臣は法皇を迎ふるに正服を着せず頗る侮辱を加へたりと云ふ。

△佛國革命の時第六世ピオ法皇は如何

一千七百八十九年佛國革命黨員は三民議會を開會して諸般の法律を改めんとす然るに中途に於て其の目的を一變し干戈を皇帝及法皇に向くるに及びたり其他離俗者の領地を沒收すること司教の數を減少すること及び公會の參事員を排して之を民選にすること等の法律を制定したり此の法律を離俗者に對する憲法なりと云ひ而して離俗者は此の憲法を遵守せざる可らずと迫れり時に一千七百九十一年なり第六世ピオ法皇は此の憲法は離教なりと認定したるにより之を遵守することを嚴禁したり素より此憲法を遵守したるは百三十五人中僅かに四人に過ぎず又神父六萬人中にて僅かに一萬人に過ぎざるのみならず此等と雖も畢竟止むを得ざるに出たるものなれば終に法皇に對して忠實を盡すに至りたり然れども之れが爲め却て虐待を招くの原因とはなりたるなり即ち國民議會の共和政府の勢熾にして第十四世紀に於ては佛國のアピンヨンなる法皇所領の地を奪ひ君主專制を排斥して國王たる第十六世ルードピヨ王の死刑を執行し亞で法皇を迫害せんとせり而して軍を以太利に派遣せしめ而して又た道理と云ふ宗教を創始して公會に換へんとせり而して勝利は共和政府に歸し法皇はトレンチノに於てフェラーロ、

ポロイノ、ラベンに共和政府を布くことを盟約せり于時一千七百九十七年なり其の翌年に及び羅馬に於ても又た共和政府を建つるに及びたり然れども衆皆な意を法皇に屬するにより共和政府は法皇を羅馬へ置くことを不利とし遂に羅馬より放逐し後法皇を佛國に置くに至れり初め法皇の放逐せらるゝや人民は其の途中に於て之れを奉迎し法皇萬歳の聲は沸くが如くなりし而して憲兵は之が制止に力を盡すと雖も人民等は容易に其の命に従はざりしと云ふ而して法皇は佛國フランスに至りしときは身體衰弱して一歩も歩むこと能はざるにより法皇は自から死期の近きたるを知りて終油の秘蹟を受け忠實なる侍臣に向て現世の別離を陳べ敵の罪を赦して天國に逝れたと云ふ時に一千七百九十九年八月二十九日なり年八十一歳なり。

△第六世ピオ法皇に相續せし人は誰なるか

第七世ピオ法皇之れに繼ぎて即位たり之れより先き無神論の哲學等は第六世ピオ法皇の崩御と共に公會は煙滅に歸す可しと言へり然れども天主が我公會と共に居るべしとの約言何とて虚事となり了るべき故に共和政府の軍は第六世ピオ法皇勝ちたりと雖も

法皇の崩るや魯獨英三國の同盟軍は佛軍を破り佛軍は以太利を退きたるにより樞機員等は其の放逐地よりベニースに參集し紀元一千八百零三年三月十四日法皇を選舉したり第七世ピオ法皇是なり。

ベニースの地は英魯獨三國同盟軍の始めて占領したる地にして又最初に於て平和に歸し樞機員等は早く此の地に集まりたるにより容易に之を選舉するを得たり之天主が魯の離教英獨のプロテスタンを利用して法皇の選舉を容易ならしめたるものと云ふ可し而して第七世ピオ法皇の即位後ポナバルトが埃及より來りて又伊大利に入るを得たるも皆な天主の御恵に據らずんばあらず後ちポナバルトはマレンゴに於て勝ち其勢破竹の如く容易に當る可からず依りて公會も亦危險に陥らんことを患ひしがポナバルトは夙に宗教の必要を認め大に國內を矯正せんと乃ち法皇に全權公使を派遣して之を法皇に謀りコンコルダ即ち政府と公會との法律を規定し又た舊に復するを得たり彼離俗者選任の權の如きも法皇に服し更らに教區を定めて佛國內の紛亂を一洗するに及びたり後ちポナバルトがナポレオン第一世の名を以て佛國の皇帝となるに及びても法皇は

一層親睦を求めんがためナポレオンの即位式に親臨せられたり干時一千八百〇四年十月二日なり

△法皇と那倫翁との親睦久しく保ちしか

公會の敵は那倫翁と法皇の親睦を妬み之を不和ならしめんとして離間中傷したれども那倫翁は斷乎として之を斥け益々親密の度を高めしが那倫翁の實弟ゼロムがプロテスタン派の信者と結婚し那倫翁は此の結婚を破らんと法皇に乞ひしに法皇は其請を許可せざりし爲め遂に不和となるに至れり加ふるに那倫翁は英國と他の歐洲諸邦との關係を絶たんとしたるに法皇は之を許さず又那倫翁己れ自身が離縁せんとしたるとき法皇亦之を許さざりしにより益々不和の度を高むるに至れり故に那倫翁は羅馬を攻略して佛國の領となし法皇をサボンと云ふ地に放逐したり時に一千八百〇九年なり後ち巴里に近きフォンテンブロンに遷され此の地に留まること五年其の間全く囚虜に異ならず總て司教等の交通を絶ちたり而して那倫翁は勢に乗じて魯西亞を攻め沍寒の爲め蒙斯古に於て敗北の身を以て纔に佛國に逃げ歸り那倫翁の名聲全く地に墜ちたり此の時に

乗じ歐洲の全土皆な反旗を掲ぐるに及びたれば那倫翁は自から帝王の位を辞するに至れり此に於て囚虜の如くなりし法皇は始めて自由を得て羅馬府に歸ることを得たりしかば人民等は大に歡喜して之れを迎へたり。

△第七世ピオ法皇時代の終りは如何

第七世ピオ法皇は那倫翁が虐待の爲め一時蒙塵の身となりしが那倫翁の敗績に依り再び地位を恢復し而して前代解除せしゼブス會を再起せしめ或は歐洲各國の王と政教兩權の區域を互に同盟を謀りたり而して法皇の敵たりし那倫翁第一世の家族親戚を扶助し又那倫翁の配所たりし聖セレン島に神父を遣はして之れを慰めたり此の時に當り秘密共濟會は起り漸々盛大なるに及び此の會の主意は總て平等主義にして革命の準備なるに依り法皇は公然其の罪を宣告して公會より放逐したり一千八百二十三年八月二十日崩す時に年八十一歳。

△第七世ピオ法皇の相續者は誰か

第十二世レオン法皇は是れなり此の法皇は碩學卓識なれども惜哉在位僅かに五年にして

崩せり。

當時歐洲人心の趨勢漸く堯季に流れ宗教を心に介せざるに至りたればプロテスタン徒は此の時に乘じて聖書の變造をなし諸國に頒送したり而も最も法皇に功勞ありしは秘密共濟會の罪を宣告し及び教師萬國派遣の事業是なり此の時に當り教父は力を盡して大に萬國布教の法を執れり又た法皇に感謝す可きは愛蘭國のプロテスタンの爲め迫害を受け恰かも自由なき奴隸の如くなりしが法皇英國政府と交渉して自由を得るに至れり而して其の自由を得たるときは法皇は既に崩じて此の世に非らざりき又た法皇は羅馬國の爲め政府の制定せし課税を輕減し病院或は學校を起して教育の普及を謀りしと云ふ崩する齡七十八民は父母に別れたるが如く愁傷禁せざりしと云ふ。

△第十二世レオン法皇の相續者は誰なるか

第八世ピオ法皇是より在位僅かに一年なり其の即位するや直に敕書を發し公會の規則を守らざるプロテスタンの變造聖書を弘むること秘密共濟等は頗る危險なること等に就心周到なる訓戒を與へ其の罪を犯すものには罪を宣告したり法皇崩するとき其の悲

みに換ふるに二個の喜あり即ち愛蘭人の自由を得しとアルゼを取り回々教の勢微弱となりたること是なり。

△第十六世グレゴリオ法皇の時代に起りし緊要事を語れ

第八ピオ法皇の相續者たる第十六世グレゴリオ法皇の時代は改革の起りし時代にして彼の秘密共濟會の如きは歐洲を煽動して革命を企てしめたり就中以太利は最も甚しかりしと云ふ之を救濟したるは埃太利亞國皇帝の力にして其の漸く平和に及びたるによりカクコンブ開穿の命をなし昔日の景光を探究せしに今日の規則は昔と異なることなきを確認するを得たり此の時露西亞皇帝は普魯尼亞の信者を迫害したり即ち公會の信者とプロテスタントと婚姻す可きこと是なり之れ公會を害し規則に違反したるを以て法皇が之を駁したるの故を以て司教の迫害せらるゝもの多きに及び是に於て法皇は之を峻拒したるに露西亞皇帝ニコラスは法皇と會見せん爲め羅馬に來りたるが法皇は皇帝が信者童貞女等を迫害せし例証を擧げて詰問したるに皇帝は大に其の非を耻ぢ初め宮殿に入りしときは揚々たりしに引換へ其出るときは消然たりしと云ふ。

△第十六世グレゴリオ法皇の最も旺盛なる事業を語れ

此の法皇の時代に及んで教師の派遣事業最も映盛を極めたり以前に於ても派遣事業の盛なりしとありしが革命黨蜂起の爲め衰運に陥りたりしを此の法皇時代に當て派遣會社を里昂に起し信者より一週一錢を醜集し之を宣教の費用に充て且つ天主の恵を受けん爲め信者は一週一度天使祝詞を唱ふることに定めたり依てゼズス會ドミニコ會フランシスコ會より外國派遣の教師は世界萬國に亘りて教を弘むるに至れり而して其の布教中は或は迫害を受け或は殉教したるもの尠ならず爲に欠員を生ずるときは其の補欠を派遣して難局に當らしめ絶へず布教に力を盡したり而して此の法皇が在位十五年にして四十の教區を新設したり其の盛なること推知す可し。

△第十六世グレゴリオ法皇の相續者は誰か

第九世ピオ法皇にして即位したるは一千八百四十六年六月十六日なり此の法皇の即位は人民輿望に佩したることなれば大に満悦の色を顯せり而して東方國は公使を法皇の許に派遣し羅馬聖座に服従することを誓約したるに依りゼルザレムを拉甸の宗教と定

めたり尙ほ羅馬政府の改革をなし憲法を發布して前革命黨の罪を赦したり革命黨尙完全なる自由を得んと欲し教父の與ふる恩典を不足となし而して終に佛國民を煽動して一千八百四十八年二月二十四日革命を起し共和政體を布けり而して其の影響は甚しく波及するを見たり革命黨は又法皇の總理大臣ロッシを殺害するに及べり干時一千八百四十八年十一月十五日なり此の時教父の書記バルマも法皇の座側に在りしが流丸に當りて死したり法皇は益々危機に迫りたるを以て潜かに身を遁れてガエツトに至る其の後ち革命黨は羅馬に於て共和政治を施行せり然るに歐洲諸邦は彼れが羅馬を潰したるを憎み埃太利亞、西班牙、佛國は同盟して革命黨を亡ぼし以て法皇を救はざる可らずとし佛軍は先づ進で羅馬府を圍んで之を略還したり時に一千八百四十九年七月三日なり而して其の翌年四月十二日法皇は羅馬に歸るを得人民は盛なる歓迎をなしたり。

△法皇羅馬に歸り如何なる要件をなせしか

即ち多くの公會の大教區小教區を設立したると是なり就中亞米利加國は其の最も大なるものにして又英吉利國に於ても聖規の秩序を整へ大教區をウエスマンスタールに其

他小教區を十二ヶ處に置たり次に和蘭に於ても全しく聖規を定めて教區を設け司教を派遣せしめたり此の和蘭の地は昔時プロテスタンの盛なる地にして公會の有位者あらざりしを以て茲に教區を設け大に布教に盡力したり。

△ピオ第九世は聖母マリアに如何なる尊號を奉りしや

神母マリアは古來基督信徒の深く希望を囑して、崇敬措く能はざりし所のものなれども神は或時代に當りて尙一層較明驗著なる道を以て聖母の榮を發揚せんと思召されれば、教會は此の天意を奉戴して尊敬の道を一新せんと欲したり、最早教會の初代より敬虔なる信者は孰れも皆聖母の無原罪を信じ居たるものなり、聖オグスチノの言に曰く『罪の問題になるときは、マリアの名を掲ぐることも不可なり、此は神の榮譽の然らしむる所なりとす』と無原罪懐胎の祝祭は東方教會に在りては疾より之を祝慶し、西方教會も亦頓て之を採用し、歴代の法皇は此の信仰を以て眞理の表白となし、鞠躬盡瘁して之を宣傳したれども、但だ尙未だ之を定理として議決するの時期にあらずと思惟したり、然れども之が爲に此の眞理に頷を挾みたるが爲なりと云ふべからず

何となれば無原罪懐胎に反する記事空論は固く之を禁じ、且トラントの公議會にても原罪に關する決議文に於ては明に聖母の名を除きたればなり。

而るにピオ第九世は之を定理として宣言するの時期到來せりと斷せられたれば、先づ全教會に祈禱を献げしめ、世界各国の公教司教に諮問して、無原罪懐胎に對する信仰の普遍的なるを檢覈したる後、此等の司教を羅馬に招集し、一千八百五十四年十二月八日を卜して、マリアの光榮なる特典を議決して之を全公教界に公宣せんと思召されたり。愈よ時期の到れるや福音の歌を畢りて後、ピオ第九世は羅馬に集まれる二百人の司教及び聖ペトロ聖殿に於て彌撒聖祭を拜聽せる諸信者と共に跪伏して聖靈の明光を祈り右果りて法皇は除に身を起し語氣感激を極め、歡淚滂沱たる裡に聖母の無原罪莊懐胎を信條とする嚴なるを放て曰く

『吾は公宣定決す、至福童貞マリアは其の懐胎の初一刻より、萬能なる神の殊恩特寵を以て、人類の救主耶穌基督の功德に依り、原罪の汚穢を悉く預防免除せられたりとする教義は神の啓示せる所なり、隨て全世界の公教信徒たる者は之を堅く永へに信

せざるべからず云々。』

百六

全教會は凱歌を奏して聖母を祝賀し、其の祝祭は一年の長きに亘りたり、佛國の公教會も亦歡呼洋々、欣喜雀躍して、此の光榮なる決議を歡迎するに於て人後に落ちざりき、里昂の如きは率先して之を祝ひ、尙年々之を反覆して信仰敬虔の美觀を呈するを以て恒例とす。

△第九世ピオ法皇に革命の反抗なきか

有り此の法皇の時代は大概平穩にして法皇は革命黨の共和政治を改革し又羅馬の領地を巡視したるに人民は大に喜んで之を歡迎したるによりて察すれば其の法皇を尊敬する意の昔日に異ならざるを証するに足らん然るに革命黨とピエモンの天子は互に相續托して法皇の權勢を失墜せしめんと努め遂に法皇の領地たるロマンヨとボロンヨとを占領したり時に一千八百五十九年なり是より先革命黨は那倫翁の力を借り事を果さんとしたるに那倫翁は之を諾せざるを憎み彼れがオペラに行んとする途中に於て爆烈彈を抛ち之を斃さんとしたるも其の目的を果す能はず後ち埃太利と交戦するに及び革命

黨は那倫翁の扶けにより之に勝つとを得たり是に於て會議を開きピエモンを以太利の主たらしめんとしたりしに歐洲の司教等は一致して之に反對したり時に法皇は孤城落日の悲境に陥り援の整ふ可きなければ親ら出軍せんと決心したるに各國は之を援はんとし來り屬する者多かりしがピエモンの總理大臣カプー伯爵は法皇に向て義兵を解く可しと命じ法皇が未だ答へざるに先ち直に羅馬の領地に進入したり此の時に當り羅馬は佛國軍の來り援くべき約あるを以てモリシエール中將はカステルファイラルドに於て開戦したるもピエモンの軍多くして敵すると能はず恃む處は唯だ佛國軍の援けのみなりしに一兵の來り援くる者なく法皇軍は九月二十九日終に滅亡したりピエモン大に喜び自から以太利と稱したれども法皇は斷乎として之を拒めり時に一千八百六十年九月十八日なり然れどもピエモン革命黨は未だ慊焉たらず羅馬を略取して都府となさんどす是に於て法皇はカンブレールに飛檄して義勇兵を募りガリバルデーと戦ひて之を破れり後ち一千八百七十年獨佛隙を生じたる爲め那倫翁に法皇保護の爲め置きたる羅馬の守備隊を召還し法皇の保護を以太利王に囑托したり然るに彼れは常に羅馬侵略の

志あるを以て此の機會に乗じて遂に羅馬を占領せり。

△日本に於ける公教の再興は如何

一千八百六十二年一月十八日日本の殉教者を列聖し同年八月八日其式を舉行し長崎の神父は此の聖人の爲めに聖堂を建てたり此の事浦上村に聞えたるを以て此の村の人民等は續々聖堂に群集し始めて昔の信者を發見するを得たり此の時其の聖堂に集まるもの多きが爲め警察は之に注意するに及べり左れば神父は信者等と共に附近の山中に入り徐に信者に向て洗禮のこと等を尋問したるに其の答ふる處聖會規則に符合するにより眞の信者たるを確認し終に今日の盛大を見るに至れり。

△ピオ第九世の在位間教會に取りて特筆すべき偉功は何ぞや

先づ第一指を認論表に屈せざるべからず、(一千八百六十四年)此はピオ第九世が各種の教書及び其他の書翰に隨時指摘したる現代の謬論謬説を蒐集したるものなれば、謬論謬説家は太く之を非難攻撃したり、今之を讀んで記憶すべき事は各種の言論が異説、僞説、危説、妄説等神學者慣用の形容語の下に之を排抵したる事即ち是なり、故に此

種の形容語は各々其の危険の程度を異にし、大小輕重の別を明に示すものなり、尙茲に注目すべき事は法皇は排抵したる言論に對しては單に眞説を掲げて正邪を明にせんことを欲したるまでにて、絶體的に反對を立てたるにあらざる事即ち是なり、今法皇が毎々好機を見て如何に用意周到に行ひたるかを例證すれば其の正邪を明にする點に於ては神は存在す、攝理なるものは確に之あり、宗教は孰れを信ずも可なるものにあらず、教會と羅馬法皇は正統の教權を有す、國權は無限的のものにあらず、道德律は神の制裁を要す、立法は之に適合せざるべからず、絶體的自由は之を肯定すべからず、羅馬法皇に向ひ現代文明の進歩と調和せざるべからずと語るが如きは、如何にも從來法皇が眞正の文明進歩と杆格したる者、如き語氣なれば、法皇の意に反するや大なりと云ふが如きは是なり、絶體的に反對を立てざりし例證としては法皇は決して、國家に權利なしと云ふか、自由の代りに專政制治を布かざるべからずと云ふかを教へたるものにあらずるを見て知るべし。

△ワチカン第十八回公議會の事は如何

次にはワチカンの公議會を掲げざるべからず、(一千八百六十九年)より(一千八百七十年に至る)、ピオ第九世の一大榮譽とすべき者は實にワチカンの公議會なりとす、同議會は一千八百六十九年十二月八日を以て開會せられ、一千八百七十年普佛戦争の爲に中絶したるものにて、司會の元に列席せるもの實に七百六十七人の多きに至れり、諸般の問題中最も天下の耳目を惹起したる者は、法座より語れる羅馬法皇の不可誤と云ふ定理是なり、換言すれば、羅馬法皇が世界の教首として法座より全教會に向て教ふる時には其言に誤なしと云ふ事即ち是なり、司教は皆之に一致したるにはあらず、中には法皇不可誤を信するも、之を議決するの機會にあらずと言ふ者ありたり、多くは此の決議にして公宣せられたらんには、必ずや政府の仇怨を招かんと憂慮したれども、愈よ最後の決を取るに當りて五百三十八人の大多數は絶體的に之を可決したり、されば之を非とせる者二人を除くの外に議題の内容に就き若くは時機の問題に就きて多少異論を吐きたる者は、他の司教等と反對の位地に立たざらんが爲に公議會の閉會式には列せざりしが、任地に歸りて後には孰れも皆大多數の決議に服するに至れり、護會

以外にも舊公教徒にして而も異端者の見を抱ける者ありたり、此等は蓋し新教國の政府に勧誘せられたる者なりとす、然れども此種の黨與は遠からずして消失したれば、ワチカンの公議會に就ては信仰の精神と公教世界の一致との紀念のみ遺存するに至りたり。

△十九世紀に於ける外國傳道の概況は如何

外國傳道の事たる、同世紀に當りては就中佛國の一大榮譽とする所なりしが、乍然外國に宣教師を派遣するの榮譽は獨り佛國のみの占有する所にあらずして、獨逸、奧太利、白耳義、伊太利、西班牙に至るまで、修院減少の衰運を來したるにも係らず、盛んに外國傳道事業に従事し、相競ふて宣教師を遠く海外異域に派遣したり、彼の英國に於てすらも此の絶大なる傳道事業に加入せざる者なきに至りしかば該事業は實に十九世紀に於て特筆大書すべき光輝ある偉業にてありたり。

△日本に於ける傳道は如何

日本にては最早二百五十年來基督教は殆ど中絶の姿なりしが、偶々佛國使節の渡航す

るに際し、佛國宣教師は之れが通辯となりて、再び基督教を日本に復興するを得たり（一千八百五十八年）同宣教師の聖堂を建つるや、日本人は之に參拜して油然過去の記憶を呼起し、幾多の人々吾等も亦基督教者なりとなりの出でたり、就て之を見るに、當初西班牙宣教師が布教せし時代より司祭なしに依然繼續せるを發見して且驚き且歡びたり、是れぞ日本に於ける基督教再興の吉徴なりける、其後慘酷なる迫害起りたれども、幸に一時なりしが（一千八百六十七年より一千八百六十八年に至る）、而も之が爲に多少布教の進運を妨げられたるに相違なし、爾來信教の自由は初めは默許の姿なりしが、後に憲法によりて公認せられ、遂にレオ第十三世の代には日本に四人の司教座をも設定するに至れり。

△交趾支那及び東京トシキョウに於ける傳道事業は如何

安南、交趾支那及び東京に於ては安南の王（就中チユチユクなる者）が慘酷なる迫害を加へたるにも係らず、佛京巴里外國傳道會の神學校出身の宣教師及び西班牙のドミニコ會の教師の功勞に依りて成効洵に著しく國民の眞正の教に歸依したる者五十萬人

の多きに達するに至りたり、此等の信徒、宣教師は往々刑吏の手にかけり、殆ど五十年間此國に於て教會初代の殉教者の如く峻法嚴刑に處せられて慘憺たる悲劇を呈したるものなり、佛兵はルイ、ピリツプ王の御宇にも屢次之に干涉して、宣教師の刑に處せられたる者を救出したるとあり、之が爲に漸次佛、西の征討軍を起すに至らしめ佛國は遂に交趾支那の下部、都府西貢をも畧取するに至れば（一千八百五十八年）其後東京、及印度支那地方に於て公會は隆盛に趣き現今其の教區の如きは十三區の多數にのぼり此れに屬する信者の數は實に七十九萬六千八百八十四人と云ふ大多數を見るに及びたり、ヅリズブル宣教師は東印度のニオラス狄族に苦心萬難を排して布教に盡碎したる勲果によりて現今一大教區を成し司教の座あり屬する信者實に一萬六千八百八十人と云ふ亦盛ならずや。

△支那に於ける傳道事業を語れ

支那に於ては幾多の皇帝が基督教徒を迫害し、殉教者を出すこと千萬を以て數ふるに至れり、此等は皆宣教師、耶穌教會ラザール會員、巴里神學校出身者等の布教養成の

結果なりとす、蓋し支那は自ら稱して中華と云ひ、西洋を目して西戎と視做し、國論は攘夷主義にして太く西教に反せり、幸にして英佛の軍が此種の迫害に終結を告げしめられたるも、此國の警戒嚴ならざるが爲に、尙且信者宣教師の殺戮掠奪に遭ふこと屢々之あり、之が爲に佛國は度毎に陳情託言賠償を得るを常とす、然るに如何なる故にや一千八百九十九年に至り支那皇帝は條忽基督教の自由を宣して、公教の司教司祭を官吏の位階に列せしめたるに至りたり。朝鮮も初代には迫害の嵐屢々吹きすさみ、信徒は此國に布教せる佛國宣教師の手下に則り、峻法酷刑の裡に珍らしき勇氣を示したりしが、此國も今は支那諸國と同じく殆ど自由を得るに至れり。

△亞弗利加に於ける傳道事業は如何

佛國樞機員にしてアルゼリア及びカルタゴの大司教なるウライジユリー師は白衣靈父會なるものを創設し、之を以て亞弗利加の北部に福音を宣傳せしめたり、自餘の部分は幾多の修道院にて之を占有し、佛領マダガスカルも亦其中に在り、最も珍らしき傳道會はウガンダ及び大湖附近の傳道會にして、同會所屬の黒人は質朴無學なれども、

頗る義勇に富み、名譽なる殉教をなせり、同所には盛大なる基督教會ありしが、一千八百九十二年英軍の打撃を被りて倒されたり、佛國は之に就き損害要償をなせども、充分の効果を收めずと云ふ。

△法皇の逝去のこと

獨乙佛國の戰爭の爲め以太利王は羅馬を略し而し王は法皇に向つて多額の俸を與へんと交渉したるも法皇は之を聽さずして宮殿に蟄居したり一千八百七十七年法皇は重病に罹り死期旦夕に迫りたれば反對者なるビスマルク及び以太利の大臣等は選舉に干渉して利を謀らんとしたるに以太利王は俄然法皇に先だちて薨じたり此時土耳其露西亞相戦ひ露西亞は將にコンスタンチノブルを占領せんとするを以て歐洲各國は之を傍觀する不能一致して露西亞國の目的を達せざらしめんとす是に於てか心を此の問題に奪はれ聖會のことは各國の閑却することとなりたり此の時法皇永眠せられたれば別に選舉の干渉を見ず樞機員はベルギーの司教ジョッキンベッキンを選舉し十三世レオンの名を以て即位式を行ひたり此の法皇先法皇の如く以太利王を排斥し宮殿に蟄居して門外

に出すと云ふ此の法皇必らずや早晚天主の祐けを享け隆運の機に達せらるゝことを信
じ信者たるものは忠節を勵まざるばある可らず。

△ピオ第九世の後繼者は誰なるか

レオ第十三世なり(一千八百七十八年)、ピオ第九世は教敵より種々に非難攻撃せられ
たれども、其裡にも尙且稱讃を博すること大なりしかば、之に比肩し得る相續者な
るべしとの世評なりしが、レオ第十三世は乃ち其の後を繼で位に即けり、同法皇は局
面一新の境遇に際して、一見新説を立てたるが如く思はるれども、其實は從來の原理
を時勢に適應して之を應用したるに過ぎず、同法皇はピオ第九世の如く、伊太利政府
の法皇領を侵畧するとに屢々反抗し、伊太利の公教徒に對しては同國政府が權利にも
教益にも反する政畧なるが故に之に賛同することを嚴禁したり、西班牙と波蘭とに對
しては其の國內の平和を冀望したると猶佛國に於けるが如くせり、當世界教首の特權
を寛大に利用し、破門の嚴罰を宣せずして、全公教世界に賢明なる教書を發し、自由
に就き、勞働者の身分に就き、奴隸廢止に就き、英國教會及び東洋離教會の一致合同

に就き、解釋法、哲學、神學、敬虔の道就中聖母及び聖ヨセフに對する敬虔の道に就
きて萬古味ふ可き言を垂れたり、不幸にして本書は今之を詳しく叙述すること能はざ
るを遺憾とす、同法皇が列聖式を擧げて聖人の位に上げたる者も亦尠からず、就中一
千九百年支那に於ける殉教者五十人餘を福音の列に加へたるが如きは最も著しきもの
なりとす、同法皇が百歳に近き老齡に達しながら鏗鏘としき公教會の利福の爲に健在
したるを見て、世界萬衆皆之を異としたりき然るに天は彼れを天國に導くの期は來り
一千九百三年八月逝去せられしが第十世ピオ法皇其の後位を繼げり萬國民は異口同音
萬歳聲裡に教父の健康と公會の隆盛を祝す可し。

△公會史研究の利益は如何

公會史を研究して得る所は一にして足らず、先づ公會の現世に於ける命運は絶へず攻
撃の衝に立ちて絶へず勝利を制しつゝあることを見る可し、神は公會の神立偉業なる
を證明せんが爲に、人間の盛んに反抗し、迫害する裡に立ちても屹然持續し、却て殉
教者を出す毎に愈よ益す隆運に赴くの實を示されたり、是れ實に教會の初代即ち三百

年間の歴史に徴して明に知るを得る所なりとす。

其後コンスタンチン帝の御宇に至り漸く平和の天地に呼吸するを得たりと思ふや又復た異端回々起りて公會に反對し、其の信條を殆ど逐條的に非難攻撃せんとする者續々踵を接して起れり、然れども公會は此時にも屹然として動かす、地獄の門到底之に勝つこと能はざりき、公會は外來の迫害に挫けざりしが如く、蕭牆の内より起れる異端にも挫けず、寧ろ却て之が爲に萬國傳道の端緒を開て、内に失ふ所は外に得る所を以て優に之を補ふの道を劃立するに至れり、是れ亦公會史の明に示證する所なりとす。又公會は基督の約束に基き世の終りまで持續すべき萬世不易の教團なれば、歐洲各國に各種の革命黨起りて之を覆さんと試みたれども、萬古依然として屹立し、彼等亡ぶるも公會は亡びず、彼等の頽敗の上に遺存しつゝ、今日まで繼續しつゝあり、其間に王國倒れ、帝政亡び、共和國の傾倒せること幾回なるを知らずと雖、公會のみは千秋萬古不變不動にして一千九百年後の今日に至るも尙且舊時の權勢と富強とを失はず、過去を見て將來を知る、公會は今後も亦必ず此の如く持續せん、物換り星移り桑滄の變

幾回に及ぶと雖、公會のみは萬古依然、除るに歩を運びて世の終り迄繼行し、遂に天上無窮の王國と冥合するに至らんこと必せり。

吾人は幸にして此の公會に生育し、其の教理に養はれ、其の秘蹟に聖られつゝ、あれば、其の信仰と其の教權とに堅く服し、善を見ては之を利し、惡を見ては之を號き、公會を侮辱する惡者の群を脱し、公會と共に戰鬥の苦を分ちつゝ、公會と共に凱旋の榮を同くせんことを冀望せざるべからず。

公會小史終

明治三十九年十一月十日印刷
明治三十九年十一月十五日發行

定價金拾五錢

著者兼
發行者

姫路市北條口百十番地
姫路市天主公教會
イシドル、シヤロン

譯者

姫路市北條口百十番地
榎尾太刀太郎
神戶市葺合町二千〇四十六番屋敷
菅間徳次郎

印刷者

姫路市北條口百十番地
姫路市天主公教會

發行所

神戶市元町二丁目二十四番屋敷
福音印刷
神戶支店

印刷所

横濱市山下町八十番地
横濱天主堂

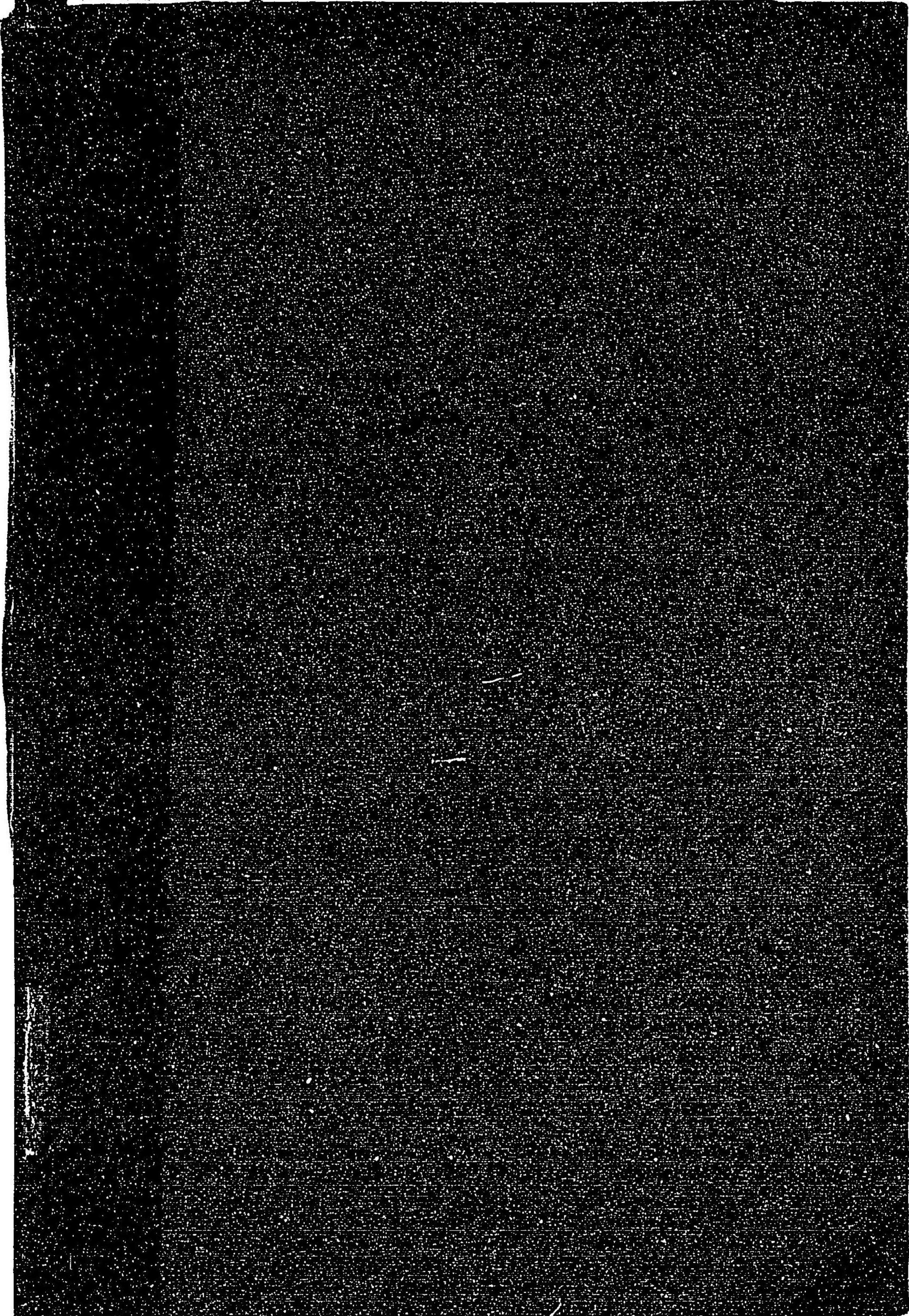
發賣所

東京市神田區神田錦町一丁目十番地
三才社

發賣所

7.12.5

325
6





020621-000-7

325-6

公教会小史

イジドル・シヤロン/著

M39

ABI-0436

